

調査研究

**障害のある子どもの教育における
情報手段活用についての知識・技能の
効果的な普及方策に関する実際的研究**

(平成19年度)

研究報告書

独立行政法人
国立特別支援教育総合研究所

目 次

研究報告書について

研究組織

第1章 研究の概要	1
第2章 研究所における情報手段活用に関する研修コースの推移	5
第3章 平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」の研修企画及び実施結果	9
第4章 研修支援ツールの活用	
1. 研修用コンテンツの蓄積と活用を支援するためのシステムについて	15
2. 事前学習及びフォローアップにおける研修支援ツールの活用	17
第5章 研修受講者の立場から	
〔平成18年度受講者の立場から〕	
1. 電子会議室を利用した受講後の継続的な研修について	21
2. 研修から学んだことを地域でいかに還元していくか	23
〔平成19年度受講者の立場から〕	
3. 研修の成果を学校でいかに活用していくか	25
4. 受講者の主体的な研修参加について	29
第6章 研修評価方法の検討	
1. 平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」のフォローアップ調査について	33
2. 研修評価の課題と今後の研修評価の在り方について	37
第7章 まとめと今後の課題	41
資 料	43

資 料

資料1	平成3年度の教育工学コースの講義・演習等と時間数	43
資料2	平成14年度の情報教育コースの講義・演習等と時間数	44
資料3	平成16年度の情報手段活用による教育的支援指導者講習会の講義・演習等と時間数	45
資料4	平成18年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」アンケート	46
資料5	平成18年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」アンケート自由記述回答	48
資料6	平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」講義等内容	51
資料7	平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」日程表	52
資料8	平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」受講者レポートについて	53
資料9	研究協議の実施内容	54
資料10	研究協議・議事録様式	55
資料11	平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」アンケート	56
資料12	平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」アンケート自由記述回答	58
資料13	平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」フォローアップ・アンケート	67
資料14	平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」フォローアップ・アンケート 自由記述回答	68

研究報告書について

本研究報告書は、調査研究「障害のある子どもの教育における情報手段活用についての知識・技能の効果的な普及方策に関する実際的研究」の研究成果を報告するものです。

この調査研究では、障害のある子どもの教育における情報手段活用に関する知識・技能をどのようにすれば効果的・効率的に普及できるかを、研究所で実施する平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」の企画・実施・評価・フォローアップを通じて検討しました。本研究により、情報手段活用に関する研修において、講義、実習、演習、eラーニングをどのように組み合わせる実施すればよいかについての知見や、効果的・効率的な研修の実施方法や改善点についての知見を得ることをねらいとしています。

この調査研究の成果は、今後の研究所における情報手段活用に関する研修の実施に生かされていきますが、情報手段活用に関する知識・技能の普及を図るさまざまな研修の場においても参考にしていただければ幸いです。

本研究を実施するにあたり、研究協力者をはじめご協力いただいた皆様に感謝いたします。

渡邊 章	教育研修情報部・総括研究員（研究代表者）
太田容次	教育研修情報部・主任研究員（サブリーダー）
中村 均	教育研修情報部・上席総括研究員、教育研修情報部長
松村勘由	教育研修情報部・総括研究員
横尾 俊	教育研修情報部・主任研究員
渡邊正裕	教育研修情報部・研究員
柳澤亜希子	教育研修情報部・研究員

研 究 組 織

所内研究分担者

渡邊 章	教育研修情報部・総括研究員（研究代表者）
太田容次	教育研修情報部・主任研究員（サブリーダー）
中村 均	教育研修情報部・上席総括研究員、教育研修情報部長
松村勘由	教育研修情報部・総括研究員
横尾 俊	教育研修情報部・主任研究員
渡邊正裕	教育研修情報部・研究員
柳澤亜希子	教育研修情報部・研究員

研究協力者

今村典宏	福井県立南越養護学校・教諭
福島浩之	長崎県立希望が丘高等養護学校・教諭

原稿執筆者

〔平成18年度受講者〕

今村典宏	福井県立南越養護学校・教諭
福島浩之	長崎県立希望が丘高等養護学校・教諭

〔平成19年度受講者〕

織田晃嘉	大阪府立茨木養護学校・教諭
和田克彦	広島県立広島北特別支援学校・教諭

第1章 研究の概要

この章では、調査研究「障害のある子どもの教育における情報手段活用についての知識・技能の効果的な普及方策に関する実際的研究」の研究の概要、研究体制、研究の経緯、研究報告書の構成等について述べている。

研究の概要

渡邊 章

(教育研修情報部)

ここでは、調査研究「障害のある子どもの教育における情報手段活用についての知識・技能の効果的な普及方策に関する実際研究」の研究の概要、研究体制、研究の経緯、研究報告書の構成等について述べる。

I 研究の概要

1. 研究の目的

本研究は、障害のある子どもの教育における情報手段活用に関する知識・技能をどのようにすれば効果的・効率的に普及できるかを、研究所で実施する平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」の企画・実施・評価・フォローアップを通じて検討することを目的としている。

2. 研究課題設定の理由

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所の教育研修情報部では、専門的研修のモデルプログラムの開発・提供を行うことが所掌事務のひとつとなっている。また、障害のある子どもの教育における情報手段の活用に関する調査及び研究を行うことも所掌事務のひとつとなっている。

本研究では、これらの両方に関係する研究課題として、平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」をモデル研修として位置づけ、この研修の「企画→実施→評価→改善」の各プロセスについて検討することによって、障害のある子どもの教育における情報手段活用に関する知識・技能を効果的・効率的に普及するための研修の実施方法について知見を得ることをねらいとしている。また、本研究を通じて、研修前の事前学習と研修後のフォローアップの有効な実施方法について知見を得ることもねらいとしている。

3. 本研究に関連する研究所の取組

本研究に関連する研究所の取組としては、教員研修の在り方については、特別研究「教員の資質の向上と教員支援システムに関する研究」において、障害のある子どもの教育を担当する教員の研修と支援システムの在り方について検討している¹⁾。

研修におけるeラーニングの活用については、まず、プロジェクト研究「障害のある児童生徒等の教育の総合的情報提供体制の構築と活用に関する実際研究」において、教員研修におけるeラーニングの活用の試みについて報告している²⁾。また、この研究でさらに継続して検討が必要な課題について検討を行った調査研究「障害のある児童生徒等の教育の総合的情報提供体制におけるコンテンツの充実・普及方策に関する実際研究」においても、eラーニングの活用方法について検討している^{3) 4) 5)}。

本研究は、研究所におけるこれらの検討を踏まえて、平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」をモデル研修として位置づけ、この研修における研修内容、実施方法、eラーニングの活用方法について実際的な知見を得ることをねらいとしている。

4. 研究の意義

本研究により、情報手段活用に関する研修において、講義、実習、演習、eラーニングをどのように組み合わせる実施すればよいかについての知見が得られ、効果的・効率的な研修の実施方法や改善点についての知見が得られる。

5. 研究の特色

本研究の特色は下記の点である。

- 1) 実際の研修会を通じて検討する実際的な研究である。
- 2) 体験型の研修とインターネットを利用したeラーニングを融合させた取組である。
- 3) 本研究所で実施している研修の改善・充実に結びつく研究である。

6. 研究の寄与

特別支援教育における情報手段活用の推進は重要な課題のひとつであり、本研究は、障害のある子どもの教育における情報手段活用についての知識・技能の普及に貢献する。また、特別支援教育における情報手段活用についての研修の実施方法に関する実際的な知見が得られ、研究所で実施する研修や各地で実施される研修の質の向上に寄与する。

Ⅱ 研究体制

1. 所内研究分担者

所内研究分担者は、教育研修情報部の研修企画担当及び情報普及担当である下記メンバーから構成されている。

渡邊 章	教育研修情報部・総括研究員（研究代表者）
太田容次	教育研修情報部・主任研究員（サブリーダー）
中村 均	教育研修情報部・上席総括研究員、教育研修情報部長
松村勘由	教育研修情報部・総括研究員
横尾 俊	教育研修情報部・主任研究員
渡邊正裕	教育研修情報部・研究員
柳澤亜希子	教育研修情報部・研究員

2. 研究協力者

研究協力者として、平成18年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」の受講者より下記2名に依頼した。

今村典宏	福井県立南越養護学校・教諭
福島浩之	長崎県立希望が丘高等養護学校・教諭

3. 原稿執筆者

上記の所内研究分担者と研究協力者に加えて、平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」の受講者である下記2名に、平成19年度受講者の立場からの原稿執筆を依頼した。

織田晃嘉	大阪府立茨木養護学校・教諭
和田克彦	広島県立広島北特別支援学校・教諭

Ⅲ 研究の経緯

本研究の実施経過は、下記のとおりである。

[平成19年]

- 4月 平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」の企画検討
- 5月～7月 研修の効果的な実施方法の検討
- 8月 受講者用Webサイトの開設及び事前学習用講義配信開始
- 9月 平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」の実施
- 9月 受講者アンケートの実施
- 9月 第45回日本特殊教育学会大会自主シンポジウムにおける報告
- 9月 研究協議会の実施
- 10月～11月 受講者アンケートデータの整理・改善点の検討
- 11月～12月 学校訪問調査、インターネットを利用した

フォローアップ

12月 フォローアップ調査の実施

[平成20年]

- 1月 原稿締め切り
- 2月 研究報告書編集作業
- 3月 研究報告書完成

Ⅳ 研究成果

本調査研究の研究成果は、以下のとおりである。

- ・自主シンポジウム「主体的な参加を促す研修のあり方を考えるー情報手段活用による教育的支援指導者研修を通してー」. 第45回日本特殊教育学会, 平成19年9月.
- ・平成19年度調査研究「障害のある子どもの教育における情報手段活用についての知識・技能の効果的な普及方策に関する実際的研究」研究報告書（本報告書）, 平成20年3月.

また、本研究の概要と実施経過については、下記の研究所Webサイトにより、情報提供を行っている。

http://www.nise.go.jp/blog/2007/10/post_706.html

なお、本研究報告書は、下記の研究所Webサイトに掲載する予定である。

<http://www.nise.go.jp/kenshuka/josa/kankobutsu/pub-b.html>

Ⅴ 研究報告書の構成

本研究報告書の第2章以降の部分は、次のような構成となっている。

第2章は、研究所における情報手段活用に関する研修コースの推移について述べている。ここでは、1) 研究所の研修事業、2) 短期研修「教育工学コース」と「情報教育コース」、3) 「情報手段活用による教育的支援指導者研修」、について述べている。

第3章は、平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」の取組について述べている。ここでは、1) 平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」の研修企画の取組、2) 平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」の実施概要について、3) 平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」の実施結果と今後の改善点について述べている。

第4章は、研修支援ツールの活用について述べている。

ここでは、まず、1) 研修用コンテンツの蓄積と活用を支援するためのシステムについて報告し、次に、2) 事前学習及びフォローアップにおける研修支援ツールの活用について報告している。

第5章では、「情報手段活用による教育的支援指導者研修」に参加した研修受講者の立場から、この研修での体験について述べていただいた。まず、平成18年度受講者の立場から、1) 電子会議室を利用した受講後の継続的な研修、2) 研修から学んだことを地域でいかに還元していくか、について報告していただいた。次に、平成19年度受講者の立場から、1) 研修の成果を学校でいかに活用していくか、2) 受講者の主体的な研修参加、について報告していただいた。

第6章は、研修評価方法の検討について述べている。ここでは、1) 初めての試みとして実施した平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」のフォローアップ調査の結果について、2) 研修評価の課題と今後の研修評価の在り方について述べている。

第7章は、本調査研究で得られた知見のまとめと今後の課題について述べている。

巻末には、本調査研究に関する資料を掲載している。

引用文献

- 1) 特別研究「教員の資質の向上と教員支援システムに関する研究」報告書，国立特殊教育総合研究所，1998.
- 2) 小野龍智：平成16年度「障害のある子どもの情報教育とその指導法」における取り組み，プロジェクト研究「障害のある児童生徒等の教育の総合的情報提供体制の構築と活用に関する実際研究」報告書，独立行政法人国立特殊教育総合研究所，37-43，2005.
- 3) 小野龍智：インターネットを利用した情報教育の講習会について－「障害のある子どもの情報教育とその指導」をとおして－，調査研究「障害のある児童生徒等の教育の総合的情報提供体制におけるコンテンツの充実・普及方策に関する実際研究（平成17年度～平成18年度）」研究報告書，独立行政法人国立特別支援教育総合研究所，29-33，2007.
- 4) 中澤恵江・小野龍智：盲ろう児童生徒担当教諭モデル講習会－二回の実施を通じたプログラムの改善－，調査研究「障害のある児童生徒等の教育の総合的情報提供体制におけるコンテンツの充実・普及方策に関する実際研究（平成17年度～平成18年度）」研究報告書，独立行政法人国立特別支援教育総合研究所，34-36，2007.
- 5) 太田容次：情報手段活用による教育的支援指導者研修におけるeラーニング活用，調査研究「障害のある児童生徒等の教育の総合的情報提供体制におけるコンテンツの充実・普及方策に関する実際研究（平成17年度～平成18年度）」研究報告書，独立行政法人国立特別支援教育総合研究所，37-39，2007.

1) 特別研究「教員の資質の向上と教員支援システムに関

第2章 研究所における情報手段活用に関する 研修コースの推移

この章では、研究所における情報手段活用に関する研修コースの推移について述べている。すなわち、1) 研究所の研修事業、2) 短期研修「教育工学コース」と「情報教育コース」、3) 「情報手段活用による教育的支援指導者研修」について述べている。

研究所における情報手段活用に関する研修コースの推移

中村 均

(教育研修情報部)

変化が生じたのは平成3（1991）年からであった。

I 研究所の研修事業

独立行政法人特別支援教育総合研究所は、昭和46（1971）年10月に国立特殊教育総合研究所の名称の下、文部省（当時）の直轄研究所として発足した。翌昭和47年度には教員研修を開始した。半年間の長期研修と1月間の短期研修で、短期研修は障害種別ごとの8コースが開設された。さらにその翌年には、長期研修は1年間、短期研修は2月余（3ヶ月研修と呼ばれたこともあったが実質は2月余）に延長されて、その後短期研修のコース編成の変更や期間に若干の変動はあったものの、ほぼ同じ長さの期間で長期研修・短期研修が実施された。昭和58（1983）年には、短期研修よりも更に短期間の講習会が開設され、その後その種類は増加した。平成12（2000）年度に実施された研修事業は、長期研修、短期研修8コース、講習会4コースであった。

平成13（2001）年4月、研究所は独立行政法人として再出発したが、これまで実施してきた研修・講習会に加え、さらに文部科学省から移管された2講習会が開設されることになった。その後も研修・講習会のコースの新設・統廃合が行われた。これら研修・講習会のうち、長期研修は平成18（2006）年度限りで廃止され、1年間の研修コースとしては平成19年度から特別支援教育研究研修員制度が発足した。なお、長期研修廃止にともなって、従来からの短期研修は特別支援教育専門研修と名称を改めた。

さて、本研究のテーマである情報手段活用に関しての研修であるが、長期研修では次のような状況であった。即ち、長期研修生（当時の呼称。その後、長期研修員）は研究室（平成8年から研究部）が受け入れることになっていたため、昭和47（1972）年5月設置された教育工学研究部の教育工学研究室が昭和49（1974）年度には教育工学を自己の研修課題とする長期研修生を受け入れている。教育工学を課題とする長期研修生は毎年派遣されてきたわけではないが、その後も受け入れはあり、昭和60（1985）年頃から、年によっては3名受け入れる状態が出来た。一方、短期研修はコース編成が障害種別で行われていたため、教育工学を研修課題とするコースは開設されていなかった。状況に

II 短期研修「教育工学コース」と「情報教育コース」

昭和60（1985）年度から、文部省（当時）が学校がコンピュータ等を購入するのに対して補助金を出すようになった。これは障害のある子どもの教育の分野でも大きな変化が起こるきっかけとなった。盲・聾・養護学校及び特殊教育センター等で実施されてきた実践研究課題の推移を調べた中村（1997）によれば、コンピュータに関する研究課題数が1986年から急増し1990～1993年にピークを迎えている。

学校現場の混乱は大きかったようである。「コンピュータは導入した。しかし、使いこなせる教員がいない。ソフトウェアもない。さてどうする？」といった状況だということがあちこちから聞こえてきた。研究所の教育工学研究部では、昭和50年代の終盤から障害のある子どもの教育におけるコンピュータの利用に関する研究課題を開始し、少数ながらソフトウェア開発も行っていた。また、研究所での開発だけではソフトウェアの数が足りないのは明白だったので、学校現場の教員の開発したソフトウェアの提供も得て、ソフトウェア・ライブラリも作りつつあった。昭和60年以降、これらを目当ての盲・聾・養護学校からの来訪者・見学者が激増した。コンピュータを障害のある子どもの教育に利用することに関して何らかのヒントを得たい、できればソフトウェアも無償ないし極めて安価で入手したいというものであった。特に年度末の2月、3月には来訪者が集中し、正確な記録は残っていないが、ほぼ毎日、場合によっては同一の日に複数の学校からの来訪者を迎えることすら少なくなかった。教育工学研究部の仕事に支障が起こる状況であり、さらに、それらの来訪の中には予算消化が主目的だと思われるものもかなり混じっていたため、次の年度は来訪者・見学者の受け入れは4～1月のみとし、2～3月は受け入れないことにすることも試みた。ところが、その2～3月になると、校長・教頭からの直談判の、あるものは懇願の、あるものは強引な電話による来訪申し込みがあり、相当件数の受け入れは行わざるを得なくなった。

ソフトウェアの提供についても問題があった。担当職員数や会計規則の面から、コピー・サービスを実施するのは困難であり、そもそもそれ以前の著作権の問題が解決できていなかった。来訪者に対して事情を説明し、所蔵するソフトウェアは見本・手本として供覧する程度に止めざるを得なかった。

前述したように、コンピュータの利用を研修課題とする長期研修員は受け入れていた。しかし、短期研修にはそれに対応するコースは開設されていなかった。それまで短期研修のコース編成が障害種別で行われていたためだという理由も既に述べたが、それ以外にも大きな課題があった。即ち、コンピュータの利用に関する研修コースでは不可欠であると考えられる実習・演習を行うのに必要な台数のコンピュータが、研究所になかったのである。当時の研究所におけるコンピュータの利用は、大型のコンピュータに接続する端末が部課に1台程度配備され、これが各種の業務に使われるという程度であった。研究課題等で必要が生じれば、それ以外に1台、2台とパーソナル・コンピュータを購入して使うことが可能ではあったが、それにしても保有台数は少なく、2ヶ月余りの短期研修の期間中受講者の利用に提供する余裕はなかった。

しかし、問題解決を全く怠っていたわけではない。研究所内に事務局が置かれた心身障害児教育財団（当時。現在は障害児教育財団）の主催する「マイコン講習会」が夏期に数日間開催され、これには職員が積極的に関わっていた。この講習会では、必要な台数のコンピュータをこの期間だけ借入し、その費用を参加費で賄うことによって、実習・演習を可能にした。

平成2（1990）年、短期研修コース編成の見直しが行われ、翌平成3年度から教育学コースが開設されることになった（マイコン講習会はこの年限りで終了することになった）。十分な台数のコンピュータやソフトウェアが準備できたわけではないが、それらの体制が整うのを待っていてでは時代の要請に遅れすぎると判断しての、いわば見切り発車であった。幸か不幸か、20名の募集に対して受講者数は13名であった。コンピュータの台数からは、1人1台に近い状況で実習・演習が行える見通しができた。ただし、ソフトウェア面では整備が行き届かず、例えば、当時広まりつつあったOSである、マイクロソフト社のMS-DOSですらコンピュータの台数分なく、受講者が所有しているものがあれば持参するよう依頼する状況であった。この短期研修コースは、「教育学コース」であり「コンピュータ利用教育コース」ではなかったため、カリキュラム内容としては学習理論、教育機器全般、教材・教具など教育学の分野で取り扱うべきものが一渡りカバーされていた。ただし、主要な話題はコンピュータに関連した事項で、基礎から応用まで講義と実習・演習が大きな位置を

占めていた。巻末の資料1として、短期研修各コース共通の講義等は省いた、平成3年度の教育学コース独自の講義・演習等の題目を示す。

受講者に関しては、コンピュータについての経験の度合いにばらつきが大きかった。コンピュータをいち早く導入した学校で先導的な試みを続けてきていて、ソフトウェア作成のためのプログラミングも不自由なく行える教員がさらなるレベルアップを目指して参加しているのに併行して、コンピュータに触れた経験がほとんどない教員も混在した。例えば、短期研修コース開設3年目の平成5（1993）年度であっても、受講者18名中2名はコンピュータを操作した経験がなかった（中村、1994）。日常的に使用している受講者は10名だった。6名は、コンピュータは使用するが、その程度は頻繁ではないという回答だった。

その後、教育学コースは概ね受講者10名台で推移し、平成14（2002）年度から「情報教育コース」と名称を改めた。ただし、この改称はカリキュラムに大きな変更を伴ってはいない。毎年受講者の要望に応えるべく可能な限りの改善を続けてきており、それら毎年行う程度の、いわば例年並みの改善が図られただけであった。その理由は次の通りである。即ち、前述したように、その前年、平成13年に研究所は独立行政法人として再出発したのだが、一部改組が行われ、教育学研究部は情報教育研究部となった。短期研修の各コースは基本的に担当研究部が担い、教育学コースは教育学研究部が担当していた。その研究部の名称が情報教育研究部と変わったので、そこが担当する短期研修コースの名称も情報教育コースと変わったのである。巻末の資料2として、やはり短期研修各コース共通の講義等は省いた、平成14年度の情報教育コース独自の講義・演習等の題目を示す。資料1と比較すれば大きな違いがあるのは事実だが、この違いの大部分は平成13年と14年度の間に生じたものではなく、平成3年以来コンピュータに関連した時代の変化に伴って漸次行われてきたカリキュラム改善の集積したものである。例えば、平成3年度の講義・演習の一覧表には全くないインターネット関連の講義・演習が平成14年度の一覧表にはその名称が直接題目に出ているものだけでも3題目12時間分設定されているが、これはこの年にいきなり設定されたということの意味しない。インターネットが一般社会に広く広まるのは1995年の商用化以降であるが、教育学コースではそれよりも早く平成6（1994）年のカリキュラムに講義を3時間設定している。資料2に示された時間増はその延長上にある。教育学コース・情報教育コースの受講者数の推移を表1に示す。

表1 教育工学コース・情報教育コースの受講者数

年度（平成）	受講者数
3	13
4	15
5	18
6	10
7	13
8	18
9	7
10	13
11	10
12	16
13	15
14	7
15	7

Ⅲ 「情報手段活用による教育的支援指導者研修」

表1に示した短期研修の教育工学・情報教育コースの受講者数を見れば、平成9年度に一時的に1桁台の受講者だったのを除き、平成13年度までは10～18名で推移してきた。ところが、平成14年度に1桁台の7名に減少し、15年度もそのままだった。独立行政法人は業務・運営の見直しを絶えず行う必要があり、役割を終えた事業や地方自治体・民間で実施可能な事業の継続は許されない。受講者数が1桁台で推移する短期研修コースをそのまま継続するのは適当でなくなった。

しかし、教員誰もがコンピュータを使いこなし、障害のある子どもの教育に情報手段が十分活用されるようになったために国レベルの教員研修が不要になったとは考えられなかった。例えば、文部科学省は学校の情報化施策として、平成17（2005）年度までに「概ね全ての教員がコンピュータを使って指導ができる」ようにすることを目標として掲げていたが、平成15年3月31日現在では、盲・聾・養護学校教員のうちコンピュータを使って指導ができる教員は37.4%にすぎなかった（文部科学省、2003）。また、情報教

育コース以外の短期研修コースで情報手段活用についての講義を実施し、希望者には時間外に教材作成や支援機器の実習を行ってきたのだが、その希望者数から判断して需要が減ったとは考えられなかった。

研修員は主に都道府県から研究所に派遣される。都道府県の研修員派遣用の予算は、全体としては減額傾向にあるものの、極端に増減することはない。情報手段の活用に関する教員研修の必要度はあっても、より緊急度・重要度の高い課題があれば、そちらに優先的に研修員が派遣されるはずである。多額の派遣予算を必要としない研修講座を開設すれば、より多くの教員の受講が望め、情報手段活用のノウハウを普及できるのではないかと考えた。

そこで、平成15（2003）年度限りで短期研修の情報教育コースは廃止し、それに替わって平成16年度から、期間を2週間（実質10日間）に短縮し、募集人員は20人から60人に増やした「情報手段活用による教育的支援指導者講習会」を開設することにした。この講習会における講義・演習等を資料3として示す。なお、本講習会の目的を的確に表現しようとするのならば、「情報通信手段の活用を中心としたアシスティブテクノロジー講習会」となろうが、アシスティブテクノロジーが一般の人に理解が行き届いているとは思えない状況を勘案して前記の名称を採用した。

平成19（2007）年度は、研究所の研修事業全体の見直しの中で、知識・技術を一方的に伝えるものではない研修コースは「講習会」ではなく「研修」という名称を使うという整理の下で、「情報手段活用による教育的支援指導者研修」と名称を改めた。

引用文献

- 1) 文部科学省：学校における情報教育の実態等に関する調査結果、2003.
- 2) 中村 均：コンピュータ利用者育成について. 特別研究報告書「心身障害児学習用コンピュータソフトの開発とその普及方策に関する研究」, 国立特殊教育総合研究所, 89-92, 1994.
- 3) 中村 均：特殊教育とマルチメディア技術. 情報管理, 40, 570-577, 1997.

第3章 平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」の研修企画及び実施結果

この章では、平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」の取組について述べている。ここでは、1) 平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」の研修企画の取組、2) 平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」の実施概要について、3) 平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」の実施結果と今後の改善点について述べている。

平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」の 研修企画及び実施結果

渡邊 章

(教育研修情報部)

I はじめに

本稿では、平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」の研修企画の取組と、その実施結果について報告する。すなわち、平成18年度の「情報手段活用による教育的支援指導者研修」の実施を踏まえて、平成19年度の研修企画ではどのような点が改訂されたか、そしてその実施結果はどのようなものであったかについて述べる。

II 本研修に関係する研究所の取組

研究所における「情報手段活用による教育的支援指導者研修」の実施に至る経緯は、第2章で報告されているとおりであるが、本研修には、研究所で行ってきた研究を踏まえて、新しい試みが盛り込まれている。

本研究所では、プロジェクト研究「障害のある児童生徒等の教育の総合的情報提供体制の構築と活用に関する実際研究」において、教員研修におけるeラーニングの活用の試みについて報告し¹⁾、さらに調査研究「障害のある児童生徒等の教育の総合的情報提供体制におけるコンテンツの充実・普及方策に関する実際研究」において、eラーニングの活用方法について検討してきた^{2) 3) 4)}。

これらの研究の成果を、研究所で実施している研修に実際に応用することをねらいとして、本研修では、平成18年度から、1) インターネットを通じた事前学習用講義の配信、2) 受講者間の情報共有及び意見交換のための電子会議室の利用、3) 研修終了後のフォローアップのための電子会議室の利用、という取組を開始した。

本調査研究では、平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」をモデル研修として位置づけ、研修内容、実施方法について検討するとともに、上記のeラーニングの活用方法について検討し、研修の改善・充実をはかることをねらいとした。

III 平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」の研修企画の取組

1. 研修企画検討のプロセス

平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」の研修企画についての検討プロセスは下記のように行われた。

- ① 平成18年度アンケート調査結果の分析
 - ② アンケート調査結果を踏まえた改善点の検討
 - ③ 平成19年度研修プログラムの作成
- これらのプロセスについて、以下に述べる。

2. 平成18年度アンケート調査結果

1) 平成18年度アンケート調査の概要

平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」の企画を行う際に、平成18年度の「情報手段活用による教育的支援指導者研修」の受講者へのアンケート調査結果の分析から、研修プログラムの改善点について検討を行った。

平成18年度の受講者数は36名であり、そのうち30名から回答が得られた。回収率は、83%であった。

平成18年度のアンケート調査用紙は、資料4に示すものであり、1) 全体としての満足度、2) プログラム内容・編成について、3) 研修の支援体制について、4) 施設・設備について、5) 生活環境について、の項目から成っていた。

本研究では、研修プログラムの検討という観点から、密接に関係のある2)の「プログラム内容・編成について」の調査項目への回答結果について示す。

2) プログラム内容・編成について

「プログラムの内容や編成の方法は適切であったと思いますか」という設問に対する回答結果は、図1に示すとおりであった。

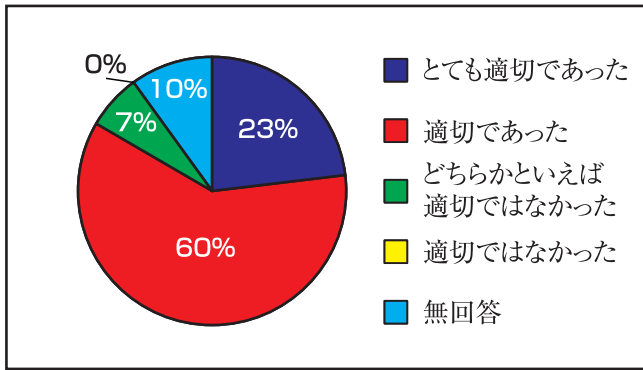


図1 プログラム内容・編成について

この図に示されているように、プログラムの内容や編成の方法については、「とても適切であった」という回答が23%、「適切であった」という回答が60%となっており、これらを合わせると83%となっていた。「どちらかといえば適切ではなかった」という回答は7%となっていた。

この結果から、平成18年度のプログラムの内容や編成方法については、おおむね適切であると受講者から評価されているといえることができる。

この設問への自由記述回答は、資料5に示されている。この自由記述回答には、改善が必要であると考えられる点に関する記述も含まれていた。

平成19年度の研修企画に際しては、これらの自由記述回答を検討し、研修をさらに充実したものとするための改善点について検討した。

3. アンケート調査結果を踏まえた改善点の検討

平成18年度アンケート調査の自由記述回答について研修実施グループで検討したところ、次のような点が改善点としてあげられた。

- ① 受講者レポートの作成方法の明確化
- ② 配信講義ビデオの改訂
- ③ 研修の趣旨についての理解促進
- ④ 研修の進め方の明確化
- ⑤ 研究協議の時間の拡充及び充実
- ⑥ 実地研修（学校見学）の見直し

まず、①については、事前に提出する受講者レポートの作成の仕方がよくわからなかったという回答がみられたため、受講者レポートの作成の仕方を説明した作成要領を、よりわかりやすく改訂することとした。

また、②については、事前学習のための配信講義を視聴する時間がなかなかとれなかったという回答が見られたため、配信講義ビデオの内容をより簡潔にし、視聴のための時間的な負担を軽減することとした。

③については、研修の趣旨が来所するまでよくわからなかったという回答がみられたことから、事前に配布する文

書に研修の趣旨を明記するとともに、配信講義ビデオにおいて研修の趣旨をわかりやすく説明することとした。

④については、どのように研修を進めていくかがわかりにくかったという回答がみられたことから、配信講義ビデオによって、研修の進め方をわかりやすく説明するとともに、来所してからのオリエンテーション時にも研修の進め方について説明することとした。

⑤については、本研修では、情報手段活用のための知識・技能を各地域で普及させるための研修企画書を作成することを研究協議の時間の課題としているが、アンケート調査の回答では、この研修企画書の作成の仕方がわかりにくかったという回答がみられた。そのため、平成19年度においては、研究協議の時間を増やすとともに、研究所職員が研究協議の時間に各班に加わって、研修企画書作成の支援を行うこととした。

⑥については、平成18年度では、2つの学校への実地研修を行っていたが、これが日期的に厳しかったという回答がみられた。そのため、遠方の学校への実地研修を廃止し、その分の時間を研究協議に充て、研究協議の時間を増やすこととした。

4. 平成19年度研修プログラムの作成

上述のアンケート調査結果に示されているように、研修プログラムの構成については、おおむね適切という回答が多かったことから、講義、演習、実習の構成については、平成18年度を踏襲することとした。しかし、研究協議については、時間数を増やすこととした。

このような方針の下に、平成19年度については、資料6に示すような講義、演習、実習、研究協議の構成とした。

また、実施日程案として、資料7に示す案を作成した。

5. アンケート調査項目の改訂

平成18年度に実施したアンケートの調査項目についても改訂の必要があると考えられた。

まず、1)の全体としての満足度についての項目では、研修の満足度について回答を求めているが、この項目への回答には、研修プログラムへの満足度だけでなく、生活面や施設・設備面への満足度など、いろいろな要因が影響を与えている可能性がある。そのため、満足度ではなく、研修のねらいに対して実際の研修がどうであったかを尋ねた方がよいと考えられた。

また、2)のプログラム内容・編成についての項目は、プログラム全体について訊いており、プログラムのどこを改善していけばよいか、その回答から見えにくい設問になっていると考えられた。

さらに、3)、4)、5)の項目は、研修の支援体制、施設・設備、生活環境について訊いており、研修プログラム

や実施方法の改善に直接的に結びつくとはいいがたい。そのため、これらはまとめて、ひとつの項目にしてもよいと考えられた。

これらの方針により、資料11に示すアンケート調査用紙に改訂した。

IV 平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」の実施概要について

平成19年度のカリキュラムに基づき、平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」を実施した。ここでは、その実施概要について述べる。

1. 研修の概要

1) 受講者

平成19年度の受講者数は、35名であった。

2) 実施期日

平成19年9月3日から9月14日までの期間、資料7に示す日程表に沿って実施した。

3) 研修実施グループ

研修実施グループ7名によって、研修の運営に当たった。

2. 受講者レポートについて

この研修では、受講者レポートを事前に作成し提出することを求めた。

受講者レポートでは以下の事項についての記述を求めた。

- ① 情報手段活用に関するこれまでの取組
- ② 研修で深めたいこと

この受講者レポートは、研究協議で利用されるものであり、来所後に受講者全員に配付された。

また、この受講者レポートの提出時に、研究協議の班編成の参考とするため、下記のキーワードの中から関心の高い事項について回答することを求めた。

- ① 障害に応じた機器利用
- ② 教材作成
- ③ アクセシビリティ
- ④ AAC
- ⑤ ネットワーク利用
- ⑥ その他

受講者レポートの作成要領は、資料8に示すとおりであった。

3. 受講者用Webサイトについて

この研修では、平成18年度から、受講者用Webサイトを開設しており、来所前から、このサイトを通じて研修に関するさまざまな連絡事項等についての情報を得られるよ

うにしている。

受講者用Webサイトについては、来所前、研修受講中、研修受講後を通じて、受講者が利用できるようにした。

この受講者用Webサイトの詳細については、本報告書の第4章で報告されている。

4. 事前学習について

この研修では、平成18年度から、来所してからの研修を円滑に受講できるように、配信講義を来所前に視聴することを受講者に求めている。

しかし、平成18年度のアンケート調査への回答において、配信講義を視聴する時間がなかなかとれなかったとの回答がみられたため、平成19年度については、より短時間(10分間程度)の配信講義用ビデオを作成した。

作成した配信講義用ビデオは、下記の2本であった。

- ① 研修内容に関するオリエンテーション
- ② 特別支援教育における情報手段活用の意義と研究所の活動

受講者は、受講者用サイトにアクセスし、これらの配信講義を視聴した。

この事前学習の詳細についても、本報告書の第4章で報告されている。

5. 講義・演習・実習について

平成19年度の研修の講義・演習・実習の構成は、資料6に示すとおりであった。

この資料に示されているように、1) 教育及び福祉における情報手段活用に関する施策についての講義、2) 各障害種別における情報手段活用に関する講義、3) 情報手段活用に関わる重要な事項、4) 情報手段活用に関する演習及び実習、から構成されていた。

6. 研究協議について

研究協議については、受講者レポートにおける関心の高い事項についての回答を踏まえて、下記のようなテーマによる班を編成した。

- ① 機器利用・AAC (7名)
- ② 教材・ネットワーク (8名)
- ③ 機器利用・ネットワーク (6名)
- ④ 感覚障害における機器活用・教材 (8名)
- ⑤ アクセシビリティ (6名)

これらの班では、受講者が各学校に戻ってから、どのように学校あるいは地域に還元するかという観点から、各班で掲げたテーマに関して校内研修等を実施する際の研修企画案について検討した。

これらの班には、研究所の研修実施グループのメンバーが参加し、各班における研究協議の円滑な運営のための支

援を行った。

研究協議の実施内容は、資料9に示すとおりであった。

各班で協議した内容については、資料10に示す様式で議事録を作成した。

7. 研修成果発表について

研修期間の最終日に、研究協議の時間に各班で検討した研修企画案について、班ごとに作成したポスターに基づき成果発表を行い、受講者間での意見交換の場とした。

V 平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」の実施結果と今後の改善点について

平成19年度の「情報手段活用による教育的支援指導者研修」においては、前述のように種々の改善のための取組を行った。ここでは、それらの改善点が受講者に対して十分な効果をあげているかどうかを、受講者へのアンケート調査の結果から検討し、それを踏まえて今後の改善点としてどのようなことがあげられるかについて述べる。

1. アンケート調査の実施方法

1) 調査対象

平成19年度の受講者35名を対象とした。

2) 調査実施期日

アンケート調査は、研修の最終日の平成19年9月14日に実施した。

3) 調査項目

アンケート調査用紙は、資料11に示すとおりであり、調査項目は、1) 指導者研修としての意義、2) 講義・実習・演習について、3) 研究協議について、4) 研修成果発表について、5) 事前学習について、6) 受講者用Webサイトについて、7) その他、の項目から成っていた。

4) 調査実施手続き

調査は、受講者に調査用紙を配布し、回答してもらった。

5) 回収率

平成19年度の受講者数は35名であり、そのうち32名から回答が得られた。回収率は、92%であった。

2. 平成19年度のアンケート調査結果

ここでは選択枝形式の回答の結果について述べる。また、各項目の回答における「その理由やお気づきの点などについて、お書きください」という自由記述回答欄への回答結果は、資料12に示されている。

1) 指導者研修としての意義

「この研修は、指導者研修として有意義であると思えますか」という設問に対する回答の結果は、図2に示すとおりであった。

りであった。

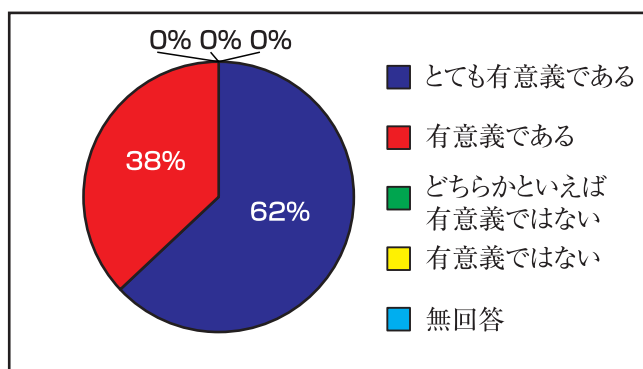


図2 指導者研修として有意義か

2) 講義・実習・演習について

「この研修の講義・実習・演習は、指導者研修として必要な知識や技術を習得する上で役立つものであると思えますか」という設問に対する回答の結果は、図3に示すとおりであった。

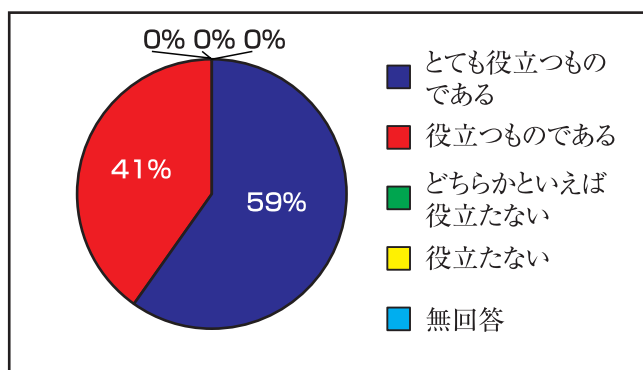


図3 講義・実習・演習について

3) 研究協議について

「この研修では、研修企画について研究協議を行いました。この研究協議は指導者研修として有意義であると思えますか」という設問に対する回答の結果は、図4に示すとおりであった。

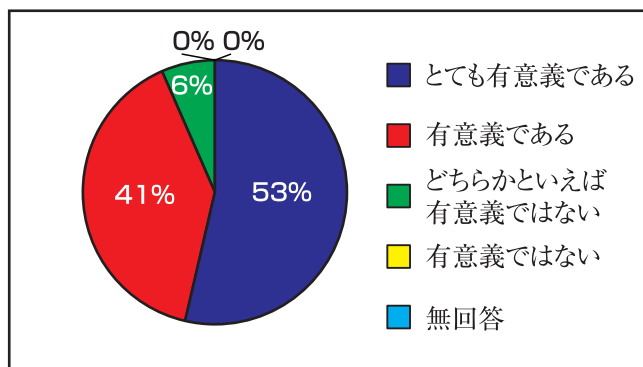


図4 研究協議について

4) 研修成果発表について

「この研修では、研究協議での検討を踏まえて、ポスター発表による研修成果の発表を行いました。この研修成果発表は指導者研修として有意義であると思いますか」という設問に対する回答の結果は、図5に示すとおりであった。

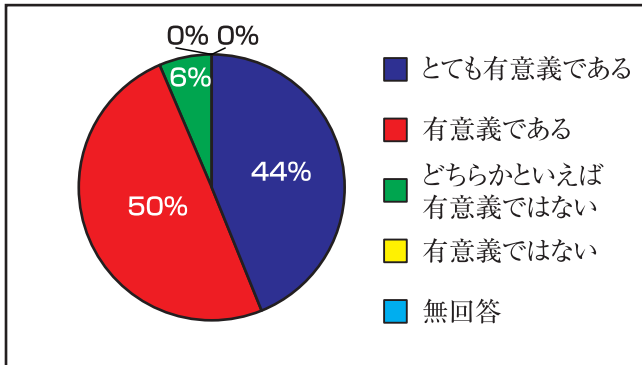


図5 研修成果発表について

5) 事前学習について

「配信講義の視聴による事前学習は、効率的に研修を進める上で有効であったと思いますか」という設問に対する回答の結果は、図6に示すとおりであった。

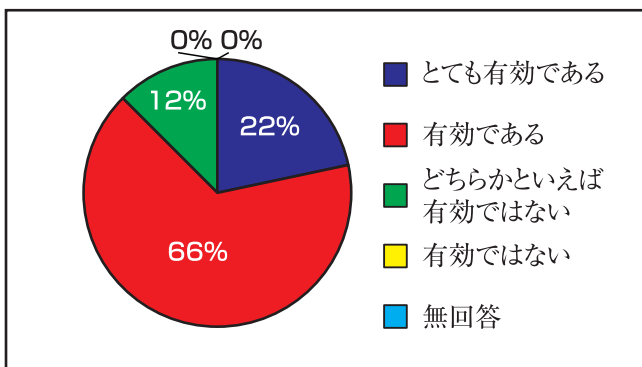


図6 事前学習について

6) 受講者用Webサイトについて

「受講者用Webサイトは、研修を円滑かつ効果的に進める上で有効であったと思いますか」という設問に対する回答の結果は、図7に示すとおりであった。

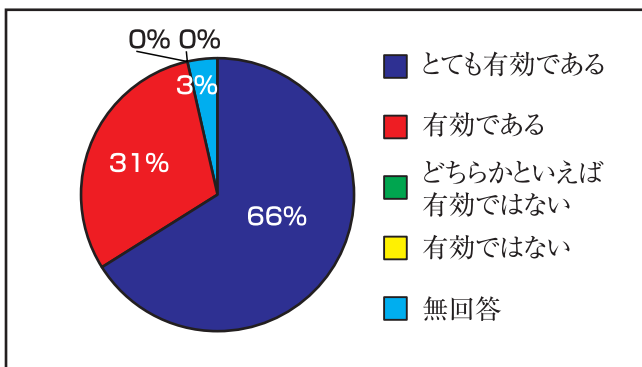


図7 受講者用Webサイトについて

3. 平成19年度アンケート調査結果についての考察

1) 指導者研修としての意義

この研修が指導者研修として有意義であるかどうかについては、「とても有意義である」という回答が62%、「有意義である」という回答が38%となっており、これらを合わせると100%となっていた。本研修は指導者研修として有意義であるという評価が得られたといえる。

2) 講義・実習・演習について

この研修の講義・実習・演習が指導者研修として必要な知識や技術を習得する上で役立つものであったかどうかについては、「とても役立つものである」という回答が59%、「役立つものである」という回答が41%となっており、これらを合わせると100%となっていた。講義・実習・演習についても、指導者研修として必要な知識や技術を習得する上で役立つものであったという受講者の評価であったといえる。

3) 研究協議について

研究協議が、指導者研修として有意義であったかどうかについては、「とても有意義である」という回答が53%、「有意義である」という回答が41%となっており、これらを合わせると94%となっていた。また、「どちらかといえば有意義ではない」という回答が6%（2名）となっていた。このように、研究協議が有意義であったとする受講者は多いが、その一方で、少数ではあるが、有意義とは思えなかった受講者がいたことがわかる。

4) 研修成果発表について

ポスター発表による研修成果発表が指導者研修として有意義であったかどうかについては、「とても有意義である」という回答が44%、「有意義である」という回答が50%となっており、これらを合わせると94%となっていた。「どちらかといえば有意義ではない」という回答は6%（2名）となっており、これも少数ではあるが、有意義とは思えなかった受講者がいたことがわかる。

5) 事前学習について

配信講義の視聴による事前学習が有効であったかどうかについては、「とても有効である」という回答が22%、「有効である」という回答が66%となっており、これらを合わせると88%となっていた。「どちらかといえば有効ではない」という回答は12%（4名）となっており、少数ではあるが、配信講義の視聴が有効とは思えなかった受講者がいたことがわかる。

6) 受講者用Webサイトについて

受講者用Webサイトが研修を円滑かつ効果的に進める上で有効であったかどうかについては、「とても有効である」という回答が66%、「有効である」という回答が31%となっており、これらを合わせると97%となっていた。また、無回答が3%となっていた。受講者用Webサイトの開

設は、受講者から有効であるという評価を得ているということが出来る。

7) まとめ

上記のように、平成19年度の研修については、受講者から高評価を得ているということが出来る。しかし、特に、事前学習については、配信講義の内容について、さらに有効なものとするよう検討が必要であると考えられる。

4. 今後の研修における改善点

1) 事前学習について

配信講義については、視聴することにより来所後の研修が円滑に行えたとする意見が多いが、さらに内容の充実を図っていく必要があると思われる。今後は、受講者にとって視聴にかかる時間的な負担が少なく、しかも内容面については一層の充実を図っていく必要があると考えられる。

2) 研究協議について

研究協議については、受講者ひとりひとりの興味・関心が異なるため、各班における協議が十分に自分の満足のいくものでなかったと感じた受講者がいたことが推察される。今後も、受講者の興味・関心に沿った班編成について検討していくとともに、研究所職員による支援体制についても検討を行っていく必要があると考えられる。

3) 研修成果発表の在り方について

研修成果発表会については、多くの受講者が有意義であったと回答していたが、少数ではあるが有意義と感じなかった受講者もいた。平成19年度はポスター発表形式による成果発表会を実施したが、研修成果発表会の持ち方については、どのような形式の成果発表会が適切かについて、さらに検討を行っていく必要があると考えられる。

4) 受講者用Webサイトの活用について

受講者用サイトは多くの受講者から有効であるという回答を得た。受講者用Webサイトの開設は、受講者への各種連絡や受講者間の情報共有等において有用であると考えられ、今後の研修における活用の拡がり期待される。今後、研究所のさまざまな研修における活用について検討していく必要があると考えられる。

VI おわりに

本稿では、平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」の研修企画の取組と、その実施結果について報告した。この研修では、研修実施後のフォローアップの取組も実施しているが、その取組の実施結果については、第6章で報告されている。

引用文献

- 1) 小野龍智：平成16年度「障害のある子どもの情報教育とその指導法」における取り組み、プロジェクト研究「障害のある児童生徒等の教育の総合的情報提供体制の構築と活用に関する実際研究」報告書、独立行政法人国立特殊教育総合研究所、37-43、2005。
- 2) 小野龍智：インターネットを利用した情報教育の講習会について－「障害のある子どもの情報教育とその指導」をとおして－、調査研究「障害のある児童生徒等の教育の総合的情報提供体制におけるコンテンツの充実・普及方策に関する実際研究（平成17年度～平成18年度）」研究報告書、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所、29-33、2007。
- 3) 中澤恵江・小野龍智：盲ろう児童生徒担当教諭モデル講習会－二回の実施を通じたプログラムの改善－、調査研究「障害のある児童生徒等の教育の総合的情報提供体制におけるコンテンツの充実・普及方策に関する実際研究（平成17年度～平成18年度）」研究報告書、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所、34-36、2007。
- 4) 太田容次：情報手段活用による教育的支援指導者研修におけるeラーニング活用、調査研究「障害のある児童生徒等の教育の総合的情報提供体制におけるコンテンツの充実・普及方策に関する実際研究（平成17年度～平成18年度）」研究報告書、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所、37-39、2007。

第4章 研修支援ツールの活用

この章では、研修支援ツールの活用について述べている。ここでは、まず、1) 研修用コンテンツの蓄積と活用を支援するためのシステムについて報告し、次に、2) 事前学習及びフォローアップにおける研修支援ツールの活用について報告している。

研修用コンテンツの蓄積と活用を支援するためのシステムについて

渡邊 正裕
(教育研修情報部)

I 国立特別支援教育総合研究所での取組

国立特別支援教育総合研究所で実施されている、情報手段活用による教育的支援指導者研修において、平成18年度より研修を3つのステージに分け、それぞれに受講者が参加するタイプを試行した。

第1ステージ 動機づけと予備知識

第2ステージ 研究所での本研修

第3ステージ eラーニングの手法による主体的な研修
継続

第1ステージ(事前研修)では、基礎的な内容の講義をネットワーク配信する。また、第2ステージ(本研修)で活用する電子会議室を開設し、講義受講やレポート提出などで活用を始める。

第2ステージでは、日々の研修記録や継続的な議論等をポートフォリオとしての電子会議室を活用して行う。企画案を検討していくための問題解決の場としての講義や実習を受講する。また、研究協議や企画演習、自主研修の時間を利用し、研修企画を検討する。そして最終的に研修企画書を提出し、発表を行う。

さらに第3ステージでは、フォローアップ研修と位置づけ、情報交換を電子掲示板で継続的に行う。

1. 平成18年度の取組

平成18年度は、CMS(Content Management System)の一種であるXOOPSをカスタマイズしてeラーニングシステムとして利用した。研修中に収集した情報を研修員の間で共有するためのフォーラム機能が好評だったようである。

第1ステージは、本研修にむけた動機づけと予備知識習得を目的に計画した。具体的には、電子会議室に設置された事前講義のコーナーに、3つの講義ビデオとオーディオ視聴のための配付資料を配置した。講義ビデオはWindows Media Video形式で配布した。オーディオはmp3形式で携帯型オーディオプレイヤーに対応した。また、資料は、PDF形式とした。

・コンテンツマネジメントシステム(CMS: Content

Management System)について

テキストや画像などのデジタルコンテンツを統合的に管理し、配信など必要な処理を行うシステムの総称。コンテンツ管理システムとも呼ばれる。

・XOOPSについて

日本で人気のあるCMSの一種。前述のフォーラム機能は、XOOPS本体の機能ではなく、追加してインストールするモジュールとして提供されている。同様に、数多くのモジュールがインターネットで提供されており、これらを選択して組み込むことによって機能を拡張することができる。

2. 平成19年度の取組

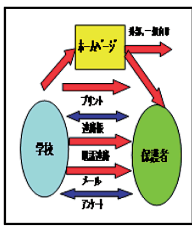
平成19年度は、CMSであるXOOPSを基に教育機関向けに開発されたLMS(Learning Management System)のNetCommonsをeラーニングのシステムとして利用した。しかし、今回の取組では、カリキュラムと同期した評価など、LMSとしての機能を十分に活用したとはいえず、CMSとしての活用にとどまった。LMSとしての機能を十分に活用するためには、評価項目の設定や、質問があった場合に誰が対応するか等、次年度以降に向けて検討すべきことも多い。

・NetCommonsについて

平成17年8月にGPL(General Public License)オープンソース・ソフトウェアとして公開、NetCommons公式サイトより配布されている情報共有基盤システム。XOOPSを基にeラーニング機能およびグループウェアの機能を強化して構築された。NetCommonsではXOOPSにはない「ルーム」という概念を持つ。「会員のプライベートルーム」「授業用ルーム」といった仮想空間が実現されている。

・KNOPPIX for NetCommonsについて

平成19年度の情報手段活用による教育的支援指導者研修の参加者から、NetCommonsのようなeラーニングやコミュニケーションのサイトについて研修のテーマにしたいという希望があったので、KNOPPIX for NetCommonsを利用した実習を行った。KNOPPIX for NetCommonsは、1枚のCD-ROMからパソコンを起動するだけで、NetCommonsのサイトを作ることができるLinuxのデイス



トリビューションである。NetCommonsは従来PC-UNIXをインストールしてあるパソコンにインストールして運用するが、パソコンにPC-UNIXをインストールするには様々な知識が要求されるため、誰もが簡単にNetCommonsをインストールして試すことはできなかった。KNOPPIX for NetCommonsを使用すれば、PC-UNIXの知識なしにNetCommonsのサイトを作って試すことが出来る。ある研修グループは、「学校要覧型ホームページからの脱却 双方向情報ネット型学校サイト」というテーマでレポートをまとめ、ポスター発表を行った。

II eラーニングの動向

1. カリフォルニア大学バークレー校の取組（英語教育ニュースより引用）

<http://www.eigokyoikunews.com/news/20071011/12.shtml>

カリフォルニア大学バークレー校（アメリカ・カリフォルニア州）は、同校の講義を動画共有サイトYouTubeで配信開始した。大学の全講義をYouTubeで公開するのは、同校が初めてで、現在300時間以上もの講義が無料で試聴可能。講座の内容は、バイオエンジニアリングから、平和紛争論、未来の大統領のための物理学など様々な分野に及ぶ。同校では、これからも配信する講座を増やしていく予定。

同校はこれまでも授業内容の公開に積極的で、2006年には音声によるポッドキャスト配信を開始。アップル社の音楽、動画配信サービス「iTunes」でも講義を無料配信していた。

・YouTubeについて（IT用語辞典e-Wordsより）

2005年2月に設立された米ネットベンチャーYouTube社が運営する、動画コンテンツ共有サイト。会員登録をすることによって誰でも容量100MB、再生時間10分以内の動画ファイルをアップロードし公開することができる。YouTubeで公開された動画ファイルは会員登録をしていないユーザでも無料で閲覧することができる。閲覧したい動画のキーワード検索も行うことができ、会員登録したユーザはさらに閲覧した動画に対するコメントを投稿したり、動画を5段階で評価したりといったこともできる。

・ポッドキャスト（Podcast）について

インターネット上で音声データファイルを公開する方法

の1つ。Webサーバ上にマルチメディア・データファイル（音声データ・動画データなど）をアップロードし、RSSを通してWWW上に公開すること。自由なペースや、自由な場所で学習ができるという利点がある。

2. 国内6大学が講義をネット公開（IT media Newsより引用）

<http://www.itmedia.co.jp/news/articles/0505/13/news080.html>

東京、東京工業、京都、大阪、早稲田、慶應義塾の6大学は、講義情報のネット公開を進める組織「日本OCW連絡会」を設立し、このほどWebサイトを開設。情報公開を始めた。講義のシラバスや資料などを無償公開し、大学外への情報発信や大学教育の質の向上につなげる。

大学の講義情報をネットで無料公開して世界中の人に使ってもらおうと、米マサチューセッツ工科大学（MIT）が2002年に始めた「Open Course Ware」（OCW）に賛同して企画した。MITの講義情報ともリンクする。

引用文献・参考文献

- 1) UC Berkeley Youtube Channel :
<http://www.youtube.com/ucberkeley>
- 2) webcast.berkeley :
<http://webcast.berkeley.edu/index.php>
- 3) eラーニング 最新動向 Watch! 2007年6月6日(水)、
「教材配信の場としてのblogの活用（1回目）」
http://kiban.typepad.jp/blog/2007/06/blog1_abc6.html
- 4) XOOPS Cube日本サイト
<http://xoopscube.jp/>
- 5) NetCommons 公式サイト
<http://www.netcommons.org/>
- 6) 太田容次：情報手段活用による教育的支援指導者研修におけるeラーニング活用、障害のある児童生徒等の教育の総合的情報提供体制におけるコンテンツの充実・普及方策に関する実際研究、pp.37-39
- 7) 太田容次・渡邊正裕：ブレンデッド型研修による教員研修に関する研究—情報手段活用による教育的支援指導者研修を通して—、日本教育情報学会第23回年会論文集
- 8) 新井紀子：NetCommons で作る、魅力あふれる学校サイト—国産オープンソースCMS・NetCommonsを使った学校サイトの構築、平成17年度Eスクエア・エボリューション成果発
- 9) IT用語辞典e-Words
<http://e-words.jp/>
- 10) 日本OCW連絡会
<http://www.jocw.jp/>

事前学習及びフォローアップにおける研修支援ツールの活用について

太田 容次
(教育研修情報部)

I はじめに

平成18年度情報手段活用による教育的支援指導者研修より活用を始めた研修支援ツールの活用については、「情報手段活用による教育的支援指導者研修におけるeラーニング活用」¹⁾においてその主旨や活用の実際について述べているところである。それをふまえた上で平成19年度情報手段活用による教育的支援指導者研修を計画・実施するにあたり、情報通信ネットワークによる研修支援ツールの活用と来所しての演習を組み合わせた受講者参加型のカリキュラム構成を行うことを確認し、下記のような3部構成を基に研修を実施した。

- ・事前（第1ステージ）事前学習と研修の準備
- ・研究所での研修（第2ステージ）本研修
- ・事後（第3ステージ）e-learningの手法による主体的な研修継続

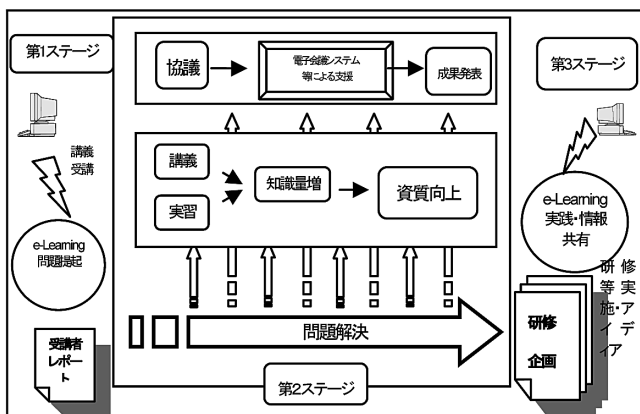


図1 研修の流れのイメージ

前年度の同研修の結果から、第1～3ステージともメディアの特性に応じた利用をすれば、研修支援ツールは受講者の参加度を高め、演習等を実施する上で、有効に機能することが明らかになった¹⁾。そこで、今年度は、研修カリキュラムと研修支援ツールの設定等の内容を、昨年度以上に関連をもたせるなどの検討を加えた。

研修支援ツールの構築にあたっては、独自の電子会議システムをWeb上に構築するのではなく、CMS(Content

Management System)を採用して、研修後の普及につながることを意識したものとした。

こうした研修支援ツールを活用することの有効性を、下記の点で検討したいと考えた。

- ・受講者が研修全体を通して問題解決的に活用を進めていく中で、研修支援ツールの検討を行うこと
- ・Web上の研修と来所後の講義や演習等の研修の組み合わせによるブレンDED型研修のあり方の検討を行うこと

ブレンDED型研修については、東原（2004）により現職教員研修への適用が報告されている²⁾が、特別支援教育に特化したものはみられない。また、こうした研修支援ツールの検討は、情報通信白書³⁾やITによる地域活性化等緊急プログラム骨子⁴⁾に述べられているように、社会的な背景からも求められていることである。

そこで、19年度本研修で使用する研修支援ツールとしては、新井（2006）により次世代情報共有基盤システムとして開発されたNetCommons⁵⁾を使用することとした。その特徴については、(1)研修用コンテンツの蓄積と活用を支援するためのシステムの構築についてにおいて述べている通りであるが、受講者の立場からは、研修終了後各地域において特別支援教育を推進する上で、特別支援学校のセンター的機能を推進するツールとしての活用も期待できることから、一般的なCMSよりも教育利用を前提に設計されたものとしてNetCommonsを採用した。

研修支援ツールとしてのNetCommonsの設定は、研修カリキュラムとの関連から下記のような構造をとった。

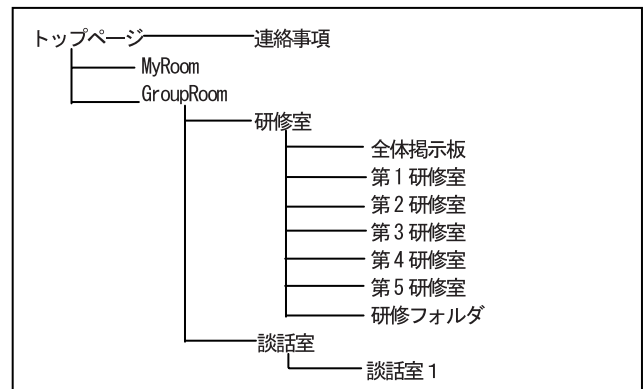


図2 グループウェアに設定した電子会議室等

トップページには、連絡事項を表示し、表示された内容は、あらかじめ設定された受講者のメールアドレスにメールマガジンとして自動配信される。なお、本研修支援ツールは、あらかじめ配布されたIDとパスワードで、トップページよりログインする形態をとっている。

MyRoomは、各自が自由なエリアとして使用可能であるが、今回は、研修期間が短いことと、特に使用を勧めなかったためにその機能を使用する受講者はいなかった。

本研修全体を通して活用するのが、GroupRoomである。その中に研修室と談話室を設置した。研修室は、研修に関係する内容を主なテーマと設定して、電子会議室とファイル共有のためのフォルダを配置した。研修室内の研修フォルダは、第1ステージの講義配信用ファイルを設置し受講者が事前に視聴出来るようにしたほか、特に第2ステージ以降では、フォルダの設置も含めて受講者が自由に活用できるファイル共有フォルダとした。さらに研修室内の電子会議室は、班ごとに行う演習のための研修室（第1～5）として設置した。また、談話室は、受講者が各種情報交換等を自由に行えるスペースとして設置した。

II 研修支援ツールを利用した事前学習の実施について

事前学習（第1ステージ）では、電子会議室（研修室を中心に）を活用して研修全体の導入等を行った。

まず事前学習として講義配信を行った。準備した講義は、以下の2本である。なお、講義で使用したスライドと同じものを資料としてほとんどのパソコンで閲覧印刷可能なPDF形式で配布した。

- ・研修内容に関するオリエンテーション（時間6分36秒）
- ・情報手段活用の意義と研究所の活動（時間10分51秒）

受講者は、事前学習の期間（約40日間）に、研修内容と進め方を説明したオリエンテーション（のべ373回視聴）と情報手段活用による教育的支援の概論と研究所の活動（のべ440回視聴）の2本を視聴した。そののべ視聴回数から受講者は一人あたり複数回視聴していることが伺える。

また、昨年度は電子メールかファックスで提出を求めている事前レポートを、その提出先として電子掲示板のGroupRoom内の研修室に設置した研修フォルダを指定し、各自がファイルを登録するよう連絡した。ほぼ全員が決められた期日に所定の方法で登録を終えることが出来た。これは、受講者のネットワークに関する基本的なスキルの高さを示していると考えられる。

さらに、来所後の研修でのコミュニケーションを活発にするために、電子掲示板で自己紹介などのメッセージ交換を促した。具体的なコミュニケーション内容の例を挙げると、研究所前の海岸の風景の写真を添えた書き込みがあ

り、それに対する感想と研修に対する意気込みが次々と書き込まれ、18名の参加者の意見交換が行われた。

なお、第2ステージにおけるツール利用の詳細については、後述しているので、ここでは詳細に述べない。

III 電子会議室を利用したフォローアップについて

研究所での研修（第2ステージ）を終え、フォローアップとして電子会議室での受講者相互の情報交換を支援した。昨年度の研修では、第2ステージ終了後より徐々にメッセージ交換数が減少していったため、今年度は、NetCommonsの電子メール配信機能を活かし、定期的にメールマガジンとして情報提供を行うこととした。メールマガジン発行に際しては、第2ステージ期間中に受講者を対象として、電子メール利用に関する聞き取り調査を行った。その結果、学校に勤務する受講者は、日常的な電子メールの利用を行っていないことが多いことが明らかになったため、携帯電話でのメール受信を可能としての配信を実施した。第3ステージでは約3ヶ月間で6回の配信を行った。その内容は、電子会議室内でのやりとりのトピックを伝えることが主であった。

表1 9月19日以降の情報交換数
（第3ステージ新規書込／全期間書込）

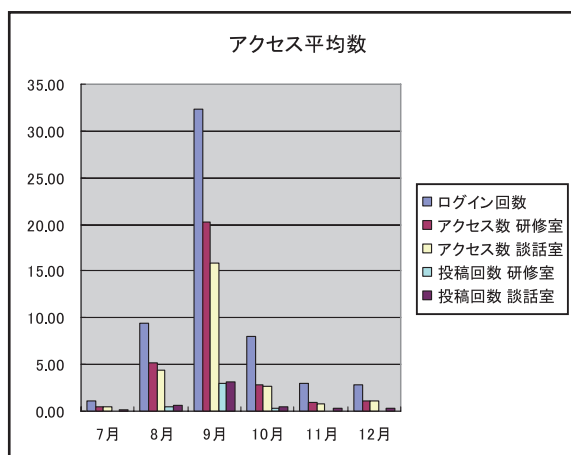
談話室	13／24スレッド
研修室全体掲示板	6／17スレッド
研修フォルダ	4／14フォルダ
第1研修室	1／4スレッド
第2研修室	5／18スレッド
第3研修室	1／6スレッド
第4研修室	1／2スレッド
第5研修室	1／8スレッド

第3ステージ期間には、表1に示すように談話室の情報交換が多く見られた。そのテーマの多くは、研修終了後の情報交換や実践情報交換、研修実施報告などが主である。中には、情報提供を求める書き込みも見られた。研修フォルダでは、第3ステージになって新規に4フォルダが作成され、受講者より情報が提供された。また、研究協議で使用した各研修室のフォルダについては、教材・ネットワークをテーマとした第2研修室のみが第3ステージに移行しても継続して使用していることがわかる。その他の研修室は、事務的連絡が行われる程度で継続的なやりとりはみられなかった。

Ⅳ 研修支援ツール活用の効果について

1. 研修支援ツール利用の視点から

図3に第1ステージを設定した7月25日より12月末までの研修支援ツールへのアクセス等に関する受講者35名の一人あたりの平均を示した。ログイン回数等多くの項目において来所しての研修である第2ステージを中心に多く利用されていることがわかる。特にアクセス回数については、9月のログイン回数の最大が32.3回となっている。それはアクセスする時間や環境が保障されており、演習等の研修の中で研修支援ツール活用の必然性があるためと思われる。また、研修室と談話室へのアクセス数も同様に、9月が群を抜いている。また、講義視聴と事前レポート提出という課題を課した7～8月はログイン及びアクセスの項目で、第3ステージの10月以降より多く見られる。第3ステージでは、メールマガジンによる定期的な研修支援ツールへのアクセス促進のためか、平均して10月は8回、11・12月は3回とアクセスが見られる。第3ステージの時期に複数の研修員へ聞き取りを行ったところ、メールマガジン



はログインへの意欲を促進しているとのことであった。

図3 研修支援ツールへのアクセス等の一人あたり月別平均数

一方、研修支援ツール内でのやりとりの内容に目を向けてみると、来所前の第1ステージでは、研修に向けた心構えも含めた情報提供を求めている受講者が多いように思われる。それは、電子掲示板への書き込み内容からだけではなく、研修終了後の受講者アンケートに同様の記述が多くみられる。特に、来所しての研修（第2ステージ）の事前に情報提供を実施することによって多くの受講者は、研修への不安軽減や主体的な参加につながると評価されている。そうした状況の中で、さらなる改善を求める声が多かった。

また、第3ステージでは、研修室と談話室の双方の電子

会議室で、2週間の研修期間（第2ステージ）で議論しきれなかった内容の継続や、実践報告や研修成果の還元に関する情報交換が主な内容として継続的に議論された。受講者アンケートでも第2ステージ終了後も引き続き継続した情報交換等を受講者間で求めている意見は多く、研修支援ツールは有効に機能していると考えられる。

2. 研修カリキュラム検討の視点から

研修カリキュラムの計画段階において、研修支援ツールの活用と研修カリキュラムとの関連を意識した。そのことにより、3つのステージを通して、継続的に研修支援ツールとして機能させることが可能となった。

また、教育機関での利用を前提としたCMSを採用することで、研修支援ツールとしての活用にとどまらず地域での活用を前提とした検討が行われた。

今後研修を支援するためのLMS（Learning Management System）としての検討が必要になると考えられる。こうした各自の研修を管理し、地域や時間にとらわれないコラボレーションを可能とするシステムを利用することと対面の研修を組み合わせるなど⁶⁾、これまでの教員研修とは異なるカリキュラム構成も可能になると考えられることから、引き続き検討が必要であると考えられる。

引用文献・参考文献

- 1) 太田容次：情報手段活用による教育的支援指導者研修におけるeラーニング活用，調査研究障害のある児童生徒等の教育の総合的情報提供体制におけるコンテンツの充実・普及方策に関する実際研究（平成17年度～平成18年度）研究報告書，独立行政法人国立特殊教育総合研究所，37-39，2007.
- 2) 東原義訓：現職教員のためのWeb研修と集合研修を融合した教員研修，日本教育工学会第20回全国大会講演論文集，969-970，2004.
- 3) 総務省：情報通信白書平成19年版，2007，<http://www.johotsusintokei.soumu.go.jp/whitepaper/ja/cover/index.htm>（2008/1引用）.
- 4) IT戦略本部：ITによる地域活性化等緊急プログラム骨子，2007，<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/it2/kettei/071107honbun.pdf>（2008/1引用）.
- 5) 新井紀子：求められるインターネットの情報共有NetCommonsでつくる学びを育む学校Webサイト，国立情報学研究所，2006.
- 6) 戸田俊文，益子典文，川上綾子，宮田敏郎：研修と実践を継続的につなぐ現職教員のための遠隔研修コースの開発－長期的・改善指向の研修コース設計の検討－，日

第5章 研修受講者の立場から

この章では、「情報手段活用による教育的支援指導者研修」に参加した研修受講者の立場から、この研修での体験について述べていただいた。まず、平成18年度受講者の立場から、1) 電子会議室を利用した受講後の継続的な研修、2) 研修から学んだことを地域でいかに還元していくか、について報告していただいた。次に、平成19年度受講者の立場から、1) 研修の成果を学校でいかに活用していくか、2) 受講者の主体的な研修参加、について報告していただいた。

電子会議室を利用した受講後の継続的な研修について

－電子会議室での受講者同士のやりとりをとおして－

福島 浩之

(長崎県立希望が丘高等養護学校)

I はじめに

昨年度受講した「情報手段活用による教育的支援指導者研修」において、受講者の立場から本研修のもたらした効果について述べてみたい。

昨年度まで所属していた学校では情報教育部を担当し、情報機器に関して若干の知識を有していたが、実際に参加してみると、本研修にはPCのエキスパートを始め、ハイテクからローテクまで幅広い教材製作や、子どもの実態に合わせたフラッシュやアニメーション制作の経験者など、これまでに自分が経験したことのない分野に詳しい知識をもつ方々が多く参加されており、自分がやってきたことはほんの一部に過ぎないことを肌で感じ、自分にとってとても有意義な研修であった。

ここでは、その研修中に利用した電子会議室での受講者同士のやりとりを中心に、従来の研修と本研修との違いや、研修後に現場に戻って実践したことなどについて述べてみたい。

II 研修へ向けての取組

1. 事前研修の取組

これまでに受講してきた研修では、研究協議等で使用する

表1 従来の研修と今回の研修との違い

	県内での研修	今回受けた研修
事前研修	・実施要項に簡単な研修内容説明 ・研修中の研究協議用の資料提出	・インターネット配信による事前学習の実施(配信講義ビデオ視聴) ・研修後の企画書提出
期間研修	・一つの講座で長くて2～3日	・2週間
その他		・電子会議室の開設

る資料を事前に提出することが多くあったが、本研修では、指導者研修ということもあり、研修を受けたあと、どのような形で学校に還元するかについての企画書を提出することが研修の始まりであった。このような研修経験が不足していたため、研修の実施要項をもらった際にかかなり戸惑いがあった。以前に本研究所で研修経験のある上司の助言を受けつつ、試行錯誤で企画書を練って提出した。研修初日には、提出した企画書をもとに一人ひとり発表があり、受講に際しての準備がしっかりできているかを問われているようで、かなり緊張して発表した。

2週間の研修講座は実際には1か月かけてもいような内容の濃いものであり、消化不良を起こしかねない状況でもあった。ただし、これは個人差があり、受講者によってはもっと突っ込んだ内容を研修したい場合もあるであろう。

こういった状況が予想されたのか、本講座の受講者用の電子会議室が、研修開始前から利用できるようになっていた。その背景には、本研修講座が「情報手段活用による教育的支援指導者研修」ということもあり、他の研修に比べPCに関する知識があることを想定された取組であった。

III 電子会議室を利用した取組

1. 電子会議室の役割

電子会議室の役割としては、事前提出資料の送付手段のひとつになっていた。その後は、研修に入ってから、各受講者が自己紹介を書き込んだり、研修中の諸連絡や講義資料も電子会議室に掲載されたりした。はじめは閲覧中心だったが、次第に受講した講義のまとめを自分のポートフォリオに保存・公開したり、電子会議室上でお互いの得意分野を生かした情報交換をしたりと、自分の研修内容をまとめる場として、また情報共有の場として、徐々に利用の幅が広がっていった。さらに、書き込みした回数が増えるごとに利用者の呼称が変化するので、次はどんな呼称になるのかと受講者同士で話題にしながら書き込みをするこ

表2 電子会議室の役割

<ul style="list-style-type: none"> ・事前提出資料の送付先 ・パーソナルメモの作成 ・事務連絡、講師の資料掲載 ・電子会議室にて受講者同士の情報交換 ・ポートフォリオに保存・公開 <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">研修内容のまとめの場や情報共有の場として利用</p>
--

ともあった。また、受講者がもっと利用しやすいように、最新記事をトップページに掲示するなど掲示板も徐々に進化していった。

2. 電子タイマー製作と活用

2週間の研修では、さまざまな分野のものが組み立てられていた。中でも、電子キットやスイッチ製作は、これまであまり経験したことのない分野ではあったが、物作りが大好きだったので、自分でも製作したいと思い、学校に戻ってから、研修の復習も兼ねて、研修期間中に購入した電子タイマーやスイッチなどを製作した。中でも電子タイマーは、研修中に担当の先生が使用されているのを見て、音の出るタイムタイマーとして利用する場面を想定し、購入して製作したいと考えていた。

製作に取りかかりはじめると、この電子タイマーの製作は、説明書に描かれている図だけでは理解が難しいことがあった。そのようなときに、電子会議室を利用して実際の部品を写真で添付し疑問を投げかけた。研修が終わったばかりということもあり、回答をすぐにもらうことができたので順調に製作することができた。情報を提供して下さった先生方は、これまでも多くの電子キットや手作り教材を製作しており、適切なアドバイスをいただくことができた。

完成後、実際に作業学習において、集中の持続が難しい生徒に作業時間を設定して利用を試みたが、光や音で残り時間や終了を知らせることで活動の見通しがもて、作業に集中できるようになった。結果として、この研修で得たことを、学校に戻ってすぐに実践に結びつけることができた。

3. 電子会議室がもたらしたものの

研修後も、受講者同士で、研修後の近況報告や実際に講座を開いたこと、受講者が製作した教材の紹介など、とてもにぎわっていた。研修後は、日を追うごとに利用者が掲示板に書き込むことは減少したが、掲示板を閲覧している

人は毎日必ずいた。

研修期間中は電子会議室以外に宿舎で情報交換をしていたが、学校に戻った後も、電子会議室を利用していると、すぐそばにお互いがあるような気がして、実際に受講した2週間以上の研修効果はあったように感じた。

表3 研修後の電子会議室での利用状況

<ul style="list-style-type: none"> ・研修後の近況報告 ・研修企画書を利用して実際に講座を行ったときの報告 ・受講者が製作した補助具を講座で紹介（情報共有）
--

研修で得たものを継続し続けるということが、課題としていつも挙げられる。最終的に電子会議室の利用が減少してしまっただけでなく、この電子会議室によって受講者同士が結びつき、一定の期間継続して研修が継続されたこと、また、この研修を踏まえて、新たな場所に情報交換のための電子会議室を設け、一部の受講者が現在も継続して情報交換をしていることは、ある程度継続的な研修が達成できたといえることができる。

IV おわりに

最後に、研修中に講師の方が言った言葉でいくつか印象に残っているものがある。ひとつは、日常生活において誰にでも“困る”場面はあるという考えを常に念頭に置くことが重要である。もうひとつは、スイッチ製作において、スイッチを押すことが目的ではなく、押すことによって自分の意志が表出できるということを知ってもらうことが目的であることを忘れないでほしいということである。どちらも当たり前と言われればそうかもしれないが、ときとしてそのことを忘れがちになることがあるような気がする。

研修講座を開く際にも同じようなことがいえると思われる。現場の教師がどんなことに悩んでいるのか、あるいはどんなことを勉強したいのか、どんな情報を共有したいと思っているのかを想定し、講座を受講することによって現場でどう展開していったらほしいかという目的を明確にする必要がある。もちろん、受講する側も、もっと研修意欲をもつ必要があるということが前提ではある。そういった意味で、今回受講したこの研修講座では、(指導者研修ということもあったのだろうが)受講に際し、研修での目的意識をもたせるための企画書の作成や研修で学んだことをもとに研修企画書としてまとめ、最終日にポスター発表を行い、研修後はその研修企画書に沿って地元で講座を開き、還元するという理想的な研修形態ができていたように感じた。

研修から学んだことを地域でいかに還元していくか

今村 典宏

(福井県立南越養護学校)

I はじめに

独立行政法人特別支援教育総合研究所での「情報手段活用による教育的支援指導者研修」で学んだことを、地域でいかに還元していくかが筆者の課題であった。本稿では、勤務校にもどってから、研修で学んだことを学校や地域に還元することをねらいとして取り組んできた実践について報告する。

II 教材製作研修会の実施

まずは、学校内で肢体不自由児の教材製作や、電子キットなどを用いた教材製作の研修会を実施した(図1)。希望者の参加という形式で行ったが、それぞれの教員が持っている「こんなことができれば」といった課題を出してもらい、解決するための道具や電子キットをお互いに知恵を出し合いながら探し出し、変更を加えながら自主製作をしていった。



図1 教材製作研修会の実施風景

こういった活動を通して、同じ教職員に知識が広がって行けば、自ずと周辺地域の学校にも広がっていくのではないかと、また、そのような情報を学校のWebページ上で公開することで地域への情報提供を行い、今後は、地域での研修会を開催できるのではないかと考えた。このような活

動によって、学校の「地域のセンター的機能」としての一面を担えるのではないかと考えた。

製作研修会で作った教材の一部を紹介する。図2に示すプリント製版機は、生徒の興味を引くように、押す部分にスイッチをつけ、音と光が出るようになっている装置である。図3は、20秒間録音できる簡易的な音声録音装置の電子キットである。

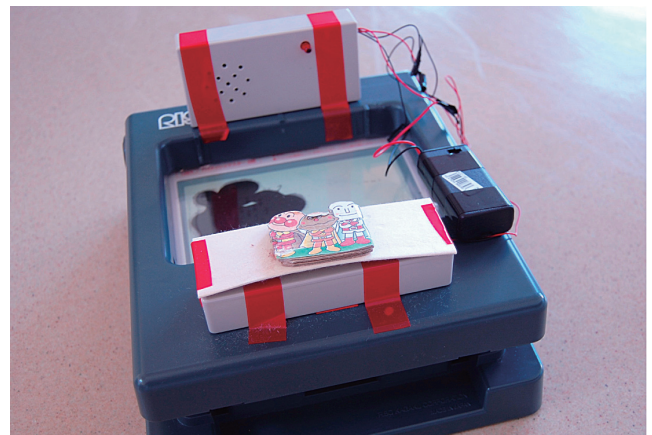


図2 プリント製版機

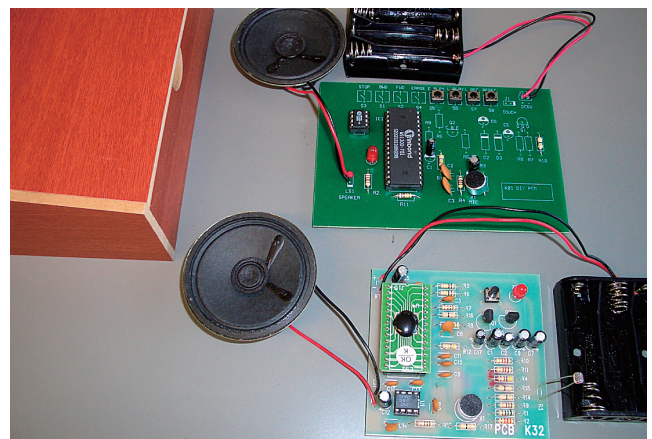


図3 音声録音装置の電子キット

III 学校Webサイトを利用した地域への還元

研修を受けるにあたり、筆者は、地域の人たちといかにコミュニケーションを図っていくかといった課題を持って

いた。そこで、学校Webサイトを使った地域への情報提供の取組を行った。テーマは「Web2.0を活用した、生産者と購入者のコミュニケーションの図り方と、ものづくり等に対する意欲の向上を目指した学習の在り方について」であった。

具体的には、1) 作業学習内容のBlogの作成、2) 生産物販売の機会を増やす、3) Webカメラの設置、4) QRコードの作成、5) メールマガジンの送信、といった取組を行った。

まず、作業学習内容のBlogは、次のようなものであった。生徒たちが普段の作業学習をこなしていく中で、その時々々の感想や意見などを書きとめ、活動状況の写真とともにBlogにアップしていく。また、生産物販売の時期が近づくとその情報をBlogに流したりした。

サイトの閲覧にはIDとパスワードが必要となっており、このサイトへ利用者を誘導するための有効な手段として、QRコードを作成し活用している。生産物購入者にQRコードを読み取ってもらうことでIDとパスワードを知らせ、サイトのアドレスも直接入力されるようになっている。

こういったBlogの作成を通し、実際に生徒たちが生産物を販売した後で、Blogへのアクセス数が多いときには、生徒たちも非常に喜んでいて。ただ、Blogでは購入者からのコメントが得にくいといったこともあり、地域の人々とのより深いコミュニケーションを得るために、今後はBlogではなくSNSに移行し、コミュニティといった枠作りの中で、多くのコメントを得たいと考えている。

次に、このサイトを立ち上げてから、生産物をつくる過程をリアルタイムに表示できないか、またそのことで購入者の関心をより引き出せないか、といった課題が挙がってきた。そのため、現在は、園芸室にWebカメラを設置し、花の苗の生育情報を映像で流すといった方法による情報提供にも取り組んでいる。

生徒たちは、随時自分たちの生産物（花の苗）を見られているといった意識の中で、活動への真剣さが増してきているように思われる。またこの取組の副産物として、生徒たちの作業学習の様子を、リアルタイムに保護者に見ても

らうといった使い方もできるようになった。これらの取組は、園芸室にとどまらず、他の作業学習班でも行っていきたいと考えている。



図4 作業学習内容のBlog

さらに、交流の一環として、地域の商業高校生との交流を、テレビ会議システムを使って、インターネット上で行った。内容は、作業学習でつくった生産物の委託販売に関する交渉である。

このような状況の中、生徒の保護者にも活動の内容を随時知ってもらうために、保護者のメールアドレスを任意で提出してもらい、作業学習やBlogの紹介といったメールマガジン配信の取組を始めている。

IV おわりに

以上に述べたような情報提供の取組を通して、生徒たちが家庭に戻ってからも、保護者と、学校で行っている活動について、より具体的なコミュニケーションが図れるようになることを期待している。さらには、こういった一連の活動が、地域に開かれた学校づくりとして評価されればと期待している。

研修の成果を学校でいかに活用していくか

－大阪府立茨木養護学校の取組をふまえて－

織田 晃嘉

(大阪府立茨木養護学校)

I はじめに

独立行政法人特別支援教育総合研究所で平成19年9月3日から9月14日まで「平成19年度情報手段を活用した教育的支援指導者研修」が実施され、筆者も受講者の一人として参加した。本研修は「障害のある子どもの情報教育を担当する教職員で、各都道府県及び政令指定都市において指導的立場にある者に対して、情報手段活用による教育的支援（アシスティブ・テクノロジー）等の専門的知識及び技能を高め、その指導力の向上を図ること」を目的に、「障害のある子どもに対する情報教育・情報手段活用による教育的支援（アシスティブ・テクノロジー）等に関する専門的知識及び技能を高め、各地域で研修を企画・実施することができる力を身に付けること」を目標とするものであった。教員を対象とした研修であるので、成果を還元する第一の対象は児童・生徒への教育と考えるのが妥当であろう。本稿では、研修の成果をどのように学校での教育に還元していくかを、筆者の勤務校での取組を中心に考えていきたい。

II 本校の取組について

1. 情報コースの概要

筆者の勤務する大阪府立茨木養護学校は昭和45年に設立された養護学校で、小学部・中学部では肢体不自由のある児童生徒を、高等部では肢体不自由及び知的障害のある生徒を対象とし、平成19年度は171名の児童生徒が在籍している。

本校の特色としては、情報コースの設置があげられる。情報コースは「高度情報社会における就業に向けた意欲を向上させ、障害種別に応じた就業に必要な専門的な知識、技能を身につけ、積極的に働く態度を育成する。また、情報機器等の操作方法や職業能力開発を通して社会参加・自立を目指した学習を行う」ことを目的としたコースとして、平成15年度に設立された。その設立の経緯については、

以前に「盲・聾・養護学校高等部のための情報教育ガイドブック」の第2章第4節「肢体不自由養護学校における取組－大阪府立茨木養護学校の実践事例－」¹⁾において紹介されているのでここでは詳しくは述べない。

2. 情報コースの課題

現在なんらかの対応が必要と考えられる課題の主なものは、以下の3つのおりである。

① 生徒数の増大

情報コース入学者であるが、平成15年度は3名、平成16年度は4名、平成17年度は7名、平成18年度は5名、平成19年度は8名と増加傾向にある（中途でのコース変更者含む）。平成19年度の情報コース在籍生徒数は20名で、設立以来最多となっている。多くの生徒を迎えるということは情報コースの存在が認知・評価されていることの表れであり、好ましいことではあるが、施設設備や教員の体制などの面で現行の体制ではこれ以上の生徒の受け入れは難しいと思われる。

② 生徒の多様化

ここ数年の入学者を見ると、肢体不自由のみを有する生徒は少数で、知的障害や発達障害と言った他の障害や疾患を併せ持っている生徒、学習の遅れや経験の少なさ、コミュニケーションや対人関係の難しさと言った課題も併せ持っている生徒が多くみられるようになってきている。特に広汎性発達障害を有する生徒の認知特性に応じた指導法やカリキュラムの検討が課題となっている。また、入学時における情報機器操作についての習熟度も、それぞれの生徒の興味・関心の所在や中学校での指導といった要因によってかなりの幅がみられる。

③ カリキュラムの再構成

設立5年目を迎え、実践にも一定の蓄積ができた現在、各学年における教科間の学習内容の連携や3年間を通してのカリキュラムの系統性について、生徒にどのような力を付けさせるかという視点から再検討する段階にあると思われる。特に前述した広汎性発達障害を有する生徒への指導と、卒業後の進路を踏まえたカリキュラム

の検討が望まれるところである。

3. 本年度のカリキュラム

以上の課題に対応するために、本年度はカリキュラムの一部について変更を行った。なお、情報コースでは各学年とも週6時間（2時間を3回）、教科情報の授業を履修することとしている。

表1 平成19年度情報コースカリキュラム

1年	2年	3年
情報A	情報B	情報C
情報と表現	コンピュータデザイン	情報実習
情報産業と社会	課題研究	課題研究

1) 情報A

ワープロソフトや表計算ソフトの活用、情報モラルなど、情報を学ぶ上で基礎となる内容についての学習を行っている。

2) 情報と表現

ポスターなどのデザインやプレゼンテーションの学習などコンピュータを使って表現をするための方法について学習する。

3) 情報産業と社会

情報化社会の技術や仕組み、ネットワークの仕組み、Webページ作成（HTML）などに取り組む。

4) 情報B

JPEG、GIF画像の作成や処理、アニメーションの作成について学んでいる。

5) コンピュータデザイン

コンピュータを使って色彩理論について学習する。

6) 情報C

卒業に向けての制作活動に取り組む。それぞれの年度の生徒の学習進度や興味関心に応じた学習内容を設定している。

7) 情報実習

2年生までの学習をより深めながら、さらに高度な作品作りを目指す。それぞれの年度の生徒の学習進度や興味関心に応じた学習内容を設定する。

8) 課題研究

それぞれの生徒の興味や関心によって、2年・3年を次の3つのグループに編成して授業を行う。

a. 文書作成(1)

卒業後の進路でのコンピュータ活用を目標に、ワープロソフトや表計算ソフトの活用能力の向上を目指している。

b. 文書作成(2)

物品製作と販売などグループの生徒全員で力を合わせての活動に取り組む。

c. マルチメディア制作

動画やWebページなどのマルチメディア作品の制作を行う。

Ⅲ 授業での取組

1. 情報Aにおける取組

1) 文字入力練習について

当授業では毎授業の最初に制限時間10分でできるだけ多くの文章を入力する文字入力練習を行っている。文字入力はコンピュータ活用能力の基礎であり、特に事務職等への就労を目指す生徒にとっては必須の技能と考えられるため、1年を通して文字入力練習に取り組むこととした。その際、生徒の多くは肢体不自由・知的障害・発達障害、もしくはそれに準ずる障害や認知特性から生じる要因によりテキストの読み取り、コンピュータ操作などそれぞれの段階において何らかの配慮を必要とする場合が多い。

情報Aの授業において、それぞれの生徒の実態に応じた支援を行うことによって、機器活用能力に一定の向上をもたらすことができたことを文字入力数という指標を使って紹介したい。

2) 生徒A

生徒Aは車いす利用の生徒である。体幹の支持性が低いため、学習や食事の際には脇までの高さの机に肘をつくことによって体幹の安定と上肢の操作性を確保している。また左腕より右腕の方が麻痺は強い。

当初はノートパソコンを利用していた（写真1）が、低い机に肘をつくことにより、腰が引けた状態となり、コンピュータ操作に影響が見られた。9月より他の活動に用いるのと同じように当生徒の脇の高さに合わせた机を用いたところ（写真2）、入力文字数に顕著な変化が見られた。脇の高さの机を用意したことで体幹の支持性と上肢の操作性が増した。また、デスクトップパソコンに変更したことに付随して麻痺の強い右腕側は手前に、左腕側は奥になるようにキーボードを斜めにおくことにより両手を使っの操作が可能になった。



写真1



写真2

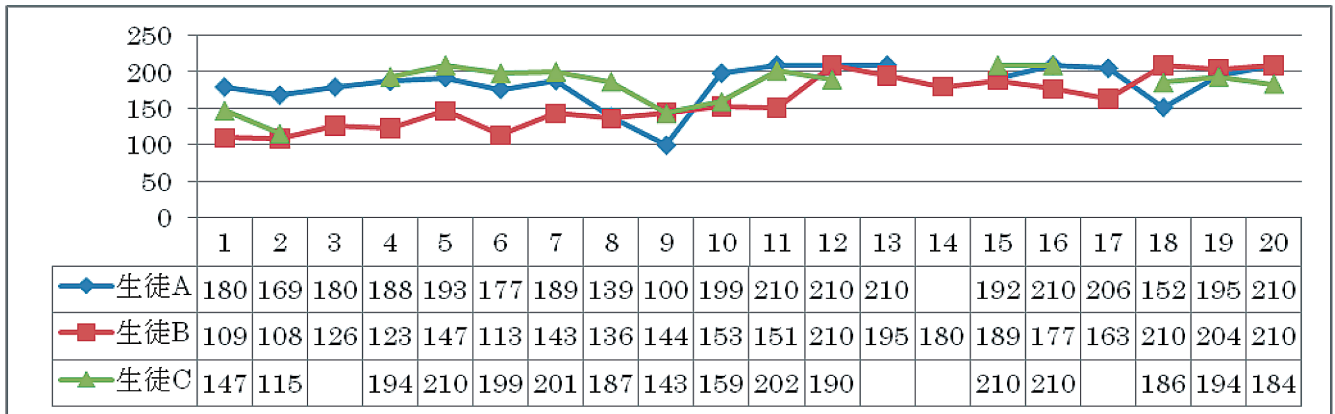


図1 文字入力数の変化

入力文字数の結果は、図1のとおりである。机を用意したのは第7回目からである。8回目、9回目に入力文字数の落ち込みがみられるが、10回目以降は入力文字数の増加がみられている。

3) 生徒B

生徒Bは全般的な能力からみて文字入力数が極端に少ない生徒であった。文章を読む際に指で行を追うこと、コンピュータ操作の際に手順を声に出して確認しながら行うこと、プロジェクタで前方・遠方に提示した内容を読み取ることに難しさを示すことから、この生徒Bには視覚認知や文章読解に難しさを有していることが推測された。

そのため、学習障害を有する生徒への指導でもよく用いられる文字スリット(写真3、写真4)を試してみた。生徒Bも使いやすいと感じたようなので継続的に使用した。スリットの使用が定着し始めたのは第5回目あたりである。

図1に見られるように、文字入力数は徐々に増加していることから、テキストの読み取りには文字スリットの利用が一定の効果を上げていると考えることができる。

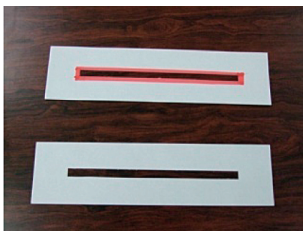


写真3



写真4

4) 生徒C

本課題では1行の文字数が30字と規定されている。

Microsoft Wordのページ設定では「文字数と行数の指定」において、既定値では「行数だけ指定する」が選ばれている。当課題においては文字数を設定するのみで、行数は設定の必要がない。そのため、「文字数と行数を設定す

る」を選択し、文字数を30字に設定しなければならない。

当生徒はこのようなページ設定の方法をなかなか習得できず、30字でなく、30行に設定したり、ページ設定自体全く行っていなかったりという状態がしばらく続いた。また、聴覚情報処理にも困難を有するため、口頭による指示では設定を指示どおりに行うことが難しかった。

当生徒への支援方策として視覚支援を行うこととした。ページ設定方法の手順を説明するプリント(写真5)を作成し、提示した。プリントを見ながらであれば、独力で指示どおりにページ設定を行うことができるようになった。

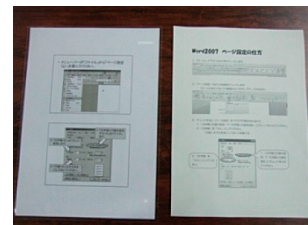


写真5

2. 情報A以外の授業での取組

情報A以外の授業においても同様にそれぞれの生徒の状況に合わせた個別の支援を行っている。以下にその例を挙げる。

1) 生徒D キーガードの使用

筋力の低下により、腕を一定時間あげることの難しい生徒Dに対して使用した。当初はパソコンデスクの段差を利用して親指を引っかけることにより手を支えて入力していた(写真6)が、疲労感も強く、操作性も決して高いとはいえなかった。そこで、キーガードを活用し、手をキーガード上に置く(写真7)ことによって、腕をあげる必要がなくなり、操作性が増し、疲労感も減少した。

生徒Dは新しい取組に抵抗感を持つことが多く、学校生活の他の場面でも一定の効果があると本人が認識しつつも、新しい取組であるということから固辞するという局

面がよく見られる。実際、情報機器利用に関してもマウスの操作にも困難さを有するので、トラックボールなどを勧めたが利用するに至らなかった。キーガードのようなこれまで使ったことのない機器の利用を受け入れたということは、生徒Dにとってそれだけ大きな改善効果を実感できたからであろう。

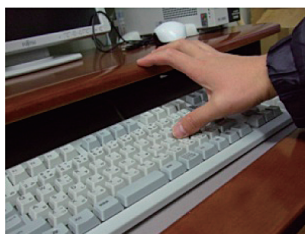


写真6



写真7

2) どっちもクリップ

ホームセンターなどで購入できるものであり、フレキシブルなアームの両側が強力なクリップになっており、片側は机などに固定、反対側で紙などはさみ、見えやすい位置に固定するものである（写真8）。視線の移動に困難を有する生徒には、特に有効と感ずる。



写真8

3. 今後の方向性

機器の導入は支援者が強制するものでなく、利用者が効果を実感し、使ってみたいと思ってこそ成功するものである。情報コースに入学する生徒でも情報機器利用において通常の機器を、通常の使い方を利用してきている生徒が大半である。身体面・認知面に起因する困難さを感じる場合でもそのまま利用している場合が多い。原因としては①周囲の支援者が支援の方策を知らない場合と、②通常の使い方へのこだわりを有している場合の二つが多く見受けられる。

①への対応としては積極的な情報提供も求められるだろう。現在、情報機器活用に関しては、様々な機器が開発され、それぞれ個別の状況に応じて適切な機器を選ぶことが可能になっているし、より効果的に活用するための方策も多々考案されている。ただし、それらの機器や利用法が広く知られているとは言い難い状況である。今後は利用・活用や機器導入の方策についての支援や実践の蓄積、情報機器活用全般に関する情報提供をさらに広く行っていく必要があるだろう。本研修を受講した指導者に当たる人間が取り組むべき課題のひとつである。

さらに難しい問題として、②の通常の使用法へのこだわりがあげられる。コンピュータはキーボードとマウスで操作するものだ、もしくは操作すべきだという固定観念やこだわりを有している場合がある。より効果的な情報機器の活用が活動の質を上げることになるという視点から個々の状況に合わせた支援や導入についての方策を考えていく必要があるだろう。

IV 研修の成果の還元について

上述のように、本校では情報手段を活用した広範な取組を行っている。そして、特別支援教育の本格的な実施を迎え、支援者である教員は生徒の教育的ニーズを把握し、適切な指導や必要な支援を行うことがますます求められるようになってきている。このような状況にあって、適切な指導や支援のためにはどのような支援が求められているかを見極める目と同時に、支援を行うための「引き出し」をどれだけ多く持っているかも要求されてくる。

この度の研修では視覚障害教育、聴覚・言語障害教育、肢体不自由教育、病弱教育、知的障害教育、発達障害教育、自閉症教育などさまざまな障害の特性や課題、それぞれに対応した情報手段活用についての知見、アシスティブテクノロジーの導入や評価、各種の支援機器やそのフィッティングなどについての知見を得ることができた。

これらの知見は、一人一人の生徒の情報手段活用に関するニーズに対応していくための「引き出し」を豊かにする上で、大きな意義があったと考えている。今後の本校における取組において、研修で得られた知見を踏まえて、一人一人の教育的にニーズに的確に対応していきたいと考えている。

V おわりに

情報機器活用、特に適切な機器を選定するには一定の知識や技術が必要である。また、個々の生徒の障害や課題を考察し、よりよい支援を提供するための知識や技術も必要となってくる。研修で得られた知見を踏まえて、それらの知識や技術を学校及び地域に対して効果的に提供し、かつ継続的に成果を活用してもらうための方策を、今後も積極的に検討していきたい。

引用文献

- 1) 大峠貴弘：第2章第4節 肢体不自由養護学校における取組－大阪府立茨城養護学校の実践事例－。盲・聾・養護学校高等部のための情報教育ガイドブック，独立行政法人国立特殊教育総合研究所，26-36，2005。

受講者の主体的な研修参加について

和田 克彦

(広島県立広島北特別支援学校)

I はじめに

勤務校では、情報教育をテーマに実践研究として取り組んできた。確かに、支援機器やパソコンの活用について一定の成果や有効性が明らかになってきた。しかし、情報教育を進めるに当たって、私には、マンネリ化と行き詰まり感があった。今回の研修では、最新の情報と本校の情報教育の方向性について何らかのヒントが得られないかという期待を持っての参加であった。この研修への参加を通じて、受講者の主体的な研修の参加に関して考えたことについて述べる。

II 学校における取組

本校では、平成15年度より高等部で普通教科「情報」を教育課程の中に取り入れ情報教育を進めてきた。「情報」をカリキュラムの中に入れることに当たっては、その当時にいろいろな意見が出された。個々の生徒の実態がある中でパソコンを中心とした情報教育に全ての生徒がなじまないこと、社会自立、生きる力ということが当時のキーワードであった。パソコンを使えることが卒業後の生活をより豊かにしていくのではないかと、しかし、パソコン以前に社会性や自立に向けては、家庭科的な要素を含んだ身辺自立を重要視すべきではないか、など情報化社会の動向と生徒のニーズにどこで整合性を持たせるかということや、何をもち本校の「情報」とするかといったことである。

こうした議論を通じて、生徒の実態に応じた「情報」の内容と、どのようにカリキュラムに位置づけていくかを、表1のように整理していった。

表1 「情報」の内容とカリキュラム上の整理

生活基礎（選択教科）		
情報	生活	リズムと体
パソコンの基本操作から応用とパソコン検定	被服、住生活、食生活など	音楽を用いたリズム活動、バランス運動など

すなわち、生活基礎という選択教科を作り、そこに情報を取り入れた。さらに「情報」については、生徒の実態から、表2に示すように3コースを設定した。

表2 「情報」の3つのコース

I	ワープロ検定を取り入れた発展的な内容
II	パソコンの基礎基本を中心とした内容
III	パソコンを含めた支援機器を活用する内容

特に、高等部では「職業教育の充実」という観点から、資格取得を目指しパソコン検定を取り入れた。合格者ができるようになり、成果も出てきた。しかし、指導体制やパソコン台数等の環境から、3コースを維持するのは難しく、「情報II、III」の生徒は0人であり、支援機器を含め幅広く情報手段活用を行っていくための情報教育の在り方が本校での課題になってきている。

高等部では、パソコンを中心とした「情報」であるが、支援機器を中心に小学部、中学部における取組も行ってきた。小学部から中学部、中学部から高等部と継続した支援機器の利用も見られるようになった。情報教育においては、パソコンやローテクにおける情報支援機器を合わせて積極的な活用が行われ、小学部から高等部へ向けた一貫性のある情報教育が実施されるようになってきた。

高等部においては、資格取得に向けパソコン検定を目指す内容に絞られるようになってきた。

支援機器の活用については、朝の会などの挨拶や返事に活用されることが多く、パソコンの活用は検定に特化して来ている。しかし、これからは、もっと活用の幅を広げていく必要があると感じていた。

勤務校における取組を通じて、このような課題意識のもとに研修に参加することになった。

III 研修への参加について

1. 研修参加までの時期について

1) 事前レポート・事前計画の作成

今回の研修では、事前のレポートや研修成果の活用等における事前計画を書くことになっていたため、そのことに

触れておきたい。

参加前の事前レポート作成や事前計画を書くに当たっては、全国から来られる受講者とどのような接点があるだろうか、的はずれなことにはなりはしないだろうかなどいろいろなことを考え、戸惑いながら仕上げた。

事前レポートの作成では、漠然としたところから、キーワードを頼りに考え、自分なりにテーマが明確になってきた。テーマを明確にしていく中で、不安を解消するためにさまざまな資料を集めて事前学習を行い、参加に向けた準備を進めた。

また、研修成果の活用に関する事前計画書を作成することは、参加への自覚を促してくれた。プレッシャーと感じることはなかったが、研修後の計画を立てることは、気が引き締まる思いであった。この研修は2週間の研修期間であったが、ある意味では、レポートを書くところから始まっていたと感じている。

2) 配信講義の視聴による事前学習

今回の研修で、インターネットの配信を視聴できたことは、とても新鮮だった。参加にあたっては、どのような講師の先生方がおられるのだろうか、どのようなペースで進んでいくのだろうか、研修内容以上に、講師の先生方の顔も気になることの一つである。よく講演会などでは、講師の先生の顔入りで広告されたものがあるが、顔写真入りの案内は好感が持て、参加者にとっては親しみやすい。

今回の研修では事前学習のための講義を受講者用Webサイト上で視聴することができた。今日の情報機器環境では不思議ではないが、まさにミッションが届いた感じで、情報手段活用の研修なのだということを実感させられた。紙による資料以上に、いろいろな情報を得ることができて安心感を持てた。

2. 研修期間中について

1) 講義について

講義では、多くのプレゼン資料が使われたが、このプレゼンの資料も情報手段活用ということだけあって、それぞれの講師の個性があふれていて、資料の作り方について、とても勉強になった。飽きさせないようにさまざまな配慮がなされていたおかげで、集中力を持続することができた。アニメーション的なものや動画を使ってあるものなど、プレゼンの資料を見ているだけでも、今後、自分が研修を主催していく上で参考になり、このような楽しいプレゼンができたらと思いながら受講できた。また、講義と演習の時間配分も参考になった。

2) 研究協議について

研究協議はとても勉強になり、有意義であった。学校に戻ってから、すぐにでも研修会を開けそうな研修企画案のポスターを作成することができたと思う。

研究協議では、班のメンバー全員が、協議に参加しやすいようなテーマを絞れるかが鍵になってくると思うが、付箋を利用して意見を出し合いながら、テーマを絞り込んでいった。多くの課題が出されたが、課題をグループ化し意見を出し合いながらテーマを整理していった。そして、研修企画案のためのポスター発表のテーマは、「ICTを活用した発達障害のある子どもの支援」に決まった。

テーマが決まってから、お互いの困っていることなどを話し合ううちに、意見が散漫になり方向性を見失いそうになったこともあったが、時間をかけるところには時間をかけ、まとめるところはまとめお互いに軌道修正しながらまとめることができた。

研究協議は、今回の研修の柱でもあり、それぞれが意見を発言し、情報を共有することで、主体的な参加につながった。メンバーの誰もが意見を発言し、参画できたと感じた。班としてポスターを作成し、発表を行うことにより、メンバー間の情報交換もでき、各学校の取組についても知ることができた。班での討議を通じて、今回の研修の受講者の目的意識の高さを感じることができた。

3) 受講者用Webサイトの利用

今回の研修では受講者用Webサイトが利用できたことも便利であった。この受講者用Webサイトは、一日の研修が終わり部屋に帰ってから、その日の講義のまとめや研修内容についての意見交換などに利用でき、非常に有効であった。この受講者用Webサイトは、時間と場所を気にせず意見交換ができ、研究協議の準備やスケジュールの確認には欠かせないものであったと思う。

講義のプレゼン資料なども、この受講者用Webサイトで配信されたので、講義の内容を後で振り返ることができ、便利だった。また、受講者用Webサイトの中に設けられた研究協議の各班の掲示板を利用することにより、受講者同士の資料交換や情報交換に役立った。

今回、受講者用Webサイトを利用し、受講者同士の意見交換や情報交換を行ったことは、受講者が主体的に研修に参加する上で、有効であったと感じた。

3. 研修終了後

研修終了後も、受講者用Webサイトを引き続き利用することができた。受講者用Webサイトにアクセスすると、各地に戻った受講者から、早速に教材を作ったという報告がされていたり、参考になる本やWebサイトの紹介などの情報が掲載されていたりして、各地に戻ってからの受講者の活躍を知り、自分も何かできないかと思った。

受講者が各地に戻って実施した研修会の報告では、画像もあり、その様子が伝わってきた。「研修を企画して、このような研修を実施しました。」と、報告をしあえる場があるということは、お互いの参考になることも多く、刺激

し合える場として有効な環境だと考える。このように受講者が各地に戻って実施した研修の取組についての情報が得られることにより、研修内容もよりよいものになっていくと考えられる。研修後にすぐに研修会を開くということは、年間行事計画の関係から難しい場合があるので、次年度の計画を立てるのに参考になると思われる。

また、受講者用Webサイトには、学会や研修会の案内なども紹介されていて、次の研修への手がかりを得ることができた。紹介のあった神戸での特殊教育学会に参加して、研修時に講師で来ていた先生方に再びお会いすることができ、情報交換や意見交換を行うことができた。

研修終了後、私自身はなかなか研修を計画できないでいたが、広島県では、「学校行こう週間」という学校公開の時期があり、学校を地域や近隣校に知ってもらおうという取組がある。そこで今回の研修に参加した際に製作した支援機器を展示し、地域の方々に知ってもらうことができた。

このように、受講者用Webサイトを利用することにより、情報交換が容易にできたことで、研修終了後も情報手段活用に関する継続した取組ができたと思う。

情報機器や支援機器の活用においては、最新情報は欠かせない。そのため、受講者用Webサイトにより、さまざまな最新情報を得ることができたことは、情報手段活用を行っていく上で有意義であると考えられる。

IV 主体的な研修参加のために

ここでは、受講者の主体的な研修参加について、マネジメントサイクルに基づいて考察してみたい。

1. PLAN (計画)

事前学習では、受講者用Webサイトを通じて動画とプレゼン資料の両方をみることができ、研修について見通しを持ちやすいように工夫されていた。封筒に入った資料が届くより、受講者用Webサイトによる情報提供は利用しやすかった。受講者には、この受講者用Webサイトをいかに主体的に利用して、研修の計画・準備を行うかが問われると考えられる。

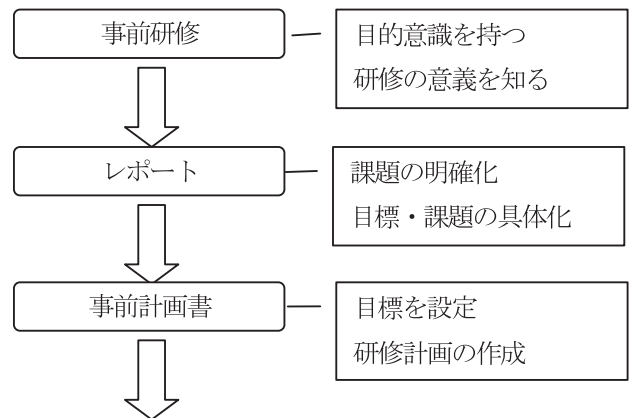


図1 事前学習の流れ

2. DO (研修実施)

研修実施においては、講義資料や受講者間のデータの情報共有を受講者用Webサイトによって行うことができ、研修を効率的に進めることができた。

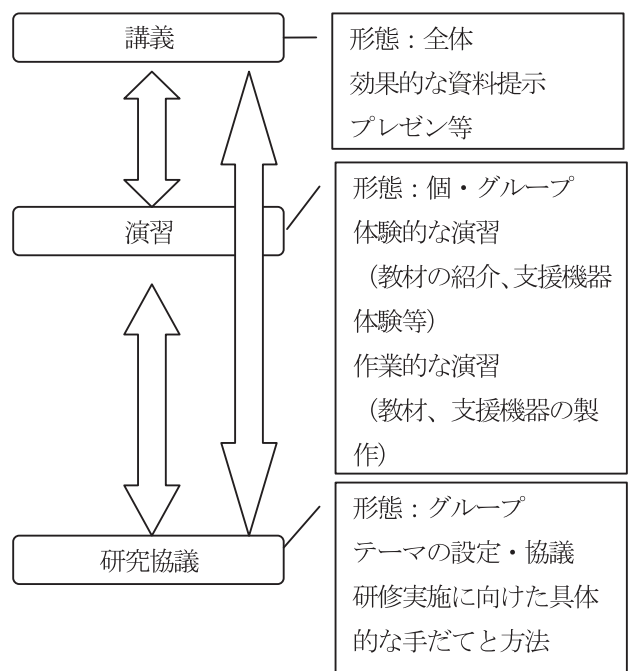


図2 研修実施期間における活動

研究協議では、講義や演習の内容も盛り込みながら討議を進めることができた。討議では実践的な意見交換ができ、各学校における取組の状況やパソコン等の整備状況なども知ることができ、具体性のある検討を行うことができた。このことは研修終了後の受講者間の交流にもつながった。

3. CHECK (評価)

研修における評価は、研修最終日に行われた各班のポスター発表がそれに当たると考えられる。

図3 ポスター発表における評価

このポスター発表では、単に成果発表というだけではなく、資料提示の仕方、最新の情報提供、話し方、発表時間のペース配分など、発表技術についても学ぶところが多かった。他の班の発表では、いろいろな教材を作ったところもあり、刺激を受けた。

4. ACTION (改善)

今回の研修に参加することにより、情報手段活用の現状を把握することができたと考えられる。このことを通じて、勤務校での取組を客観的に見るできるようになった。講義の中では、日々の教育活動について考えさせられる内容も多く、現在取り組んでいる情報教育をとらえ直す材料も得られたように思う。これらを踏まえて、図4に示すような手順で、今後の勤務校における情報教育に関する取組を改善していきたいと考えている。

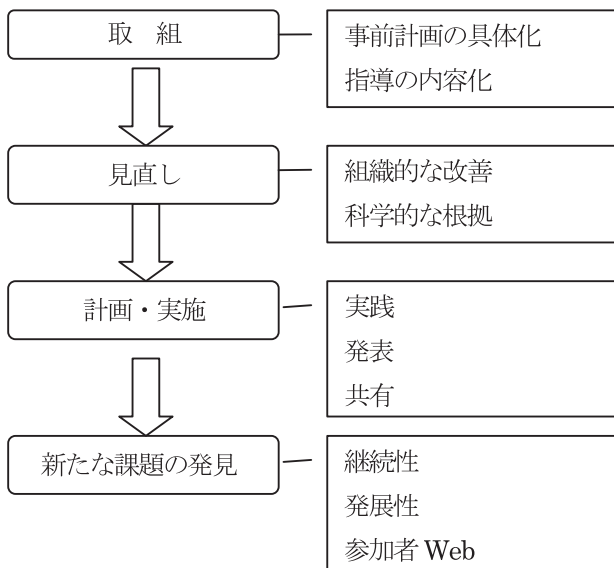


図4 学校での取組の改善に向けて

V おわりに

このように、マネジメントサイクルにあてはめてみると、自分の教育活動の実践を踏まえて、取り組むべき課題を明確にしていくことが研修への主体的な参加につながっていくのではないかとされる。

今回の研修参加において、私の場合は、勤務校での取組を通じての課題と校内外のネットワーク化について課題意識を持っていた。事前レポートの作成を通じてテーマを明確化することで、主体的な研修の参加につながったと感じている。

他の参加者においても、研究協議における積極的な発言から、課題解決に向け、日々取り組んでいる様子がうかがわれた。研修最終日の各班のポスター発表においても、各班のメンバーの意気込みを感じる事ができた。

日々の自分たちの実践について話し合うこと、自分たちの授業や学校に戻ってからの研修実施などの取組を、受講者間で積極的に情報交換していくことは、各学校に戻ってからの意欲につながり、次の研修への主体的な参加につながっていくのではないかと考える。

謝 辞

今回の研修は、多くの方にご指導いただくことができ、今後に行かせる有意義な研修であった。改めて御指導いただいた先生や受講者の方々に謝意を表したい。

参考文献

- 1) 広島県教育委員会：平成19年度広島県教育資料P121-123.

第6章 研修評価方法の検討

この章では、研修評価方法の検討について述べている。ここでは、まず、平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」のフォローアップ調査の結果について報告し、次に、研修評価の課題と今後の研修評価の在り方について述べている。

平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」の フォローアップ調査について

渡邊 章・太田 容次・渡邊 正裕
(教育研修情報部)

I 目 的

本研修は、障害のある子どもへの情報手段活用による教育的支援に関する専門的知識及び技能を高め、各地域で研修を企画・実施することができる力を身に付けることを目標としている。

研究所で実施している研修の評価については、研修実施期間の最終日に、受講者アンケートを実施してきた。しかし、受講者が、各学校にもどってから、研修の成果をどのように生かしているかということについての資料は、これまで収集していなかった。

研究所では、これまでにeラーニングの活用に関する取組を行ってきており^{1) 2)}、研修後のフォローアップにおけるeラーニングの活用に関する取組も行ってきた^{3) 4)}。

本研究では、これらの取組を踏まえて、受講者が各学校にもどってから研修の成果をどのように生かしているかに関する資料を得ることを目的として、研修受講後3か月を経過した時点で、受講者が各地で校内研修等を実施した事例があるかどうかについて、フォローアップ調査を行った。

II 方 法

1. 調査実施方法

調査は、研修終了後も引き続き利用できるようにした受講者用サイトを利用して実施した。フォローアップ調査への協力依頼を受講者用サイトに掲示し、その協力依頼は、メールによっても受講者に配信された。回答は、受講者用サイト内に置かれた設問に回答してもらう方式をとった。

2. 調査対象

平成19年度の受講者35名を対象として、調査への協力依頼を行った。

3. 調査実施期間

調査への協力依頼は、平成19年12月18日に行った。調査

への回答期限は、平成20年1月14日であった。

4. 調査項目

調査項目は、資料13に示すとおりであった。

5. 回答数

18名の受講者から回答が得られた。

III 結 果

1. 校内研修等の実施状況について

「研修後からこれまでの間に、研修したことを生かして、校内研修等を行った事例がありますか」という設問に対する回答結果は、図1に示すとおりであった。

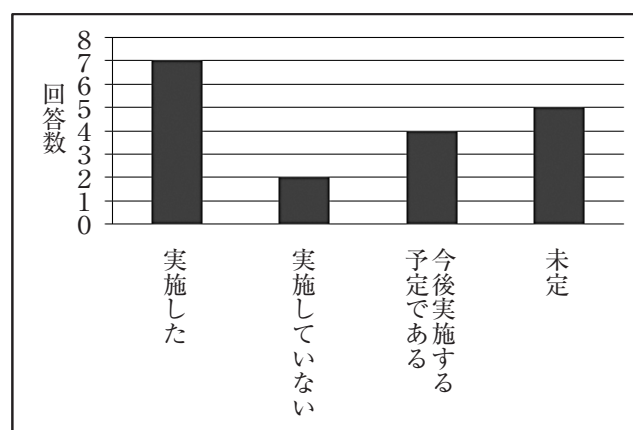


図1 校内研修等の実施状況

また、実施した研修会等の名称についての自由記述回答は、資料14に示すとおりであった。

2. 受講者用サイトの利用について

「この研修では、研究所での研修のフォローアップとして、受講者用サイトを研修後に利用できるようにしましたが、これは有意義であると思いますか」という設問に対する回答結果は、図2に示すとおりであった。

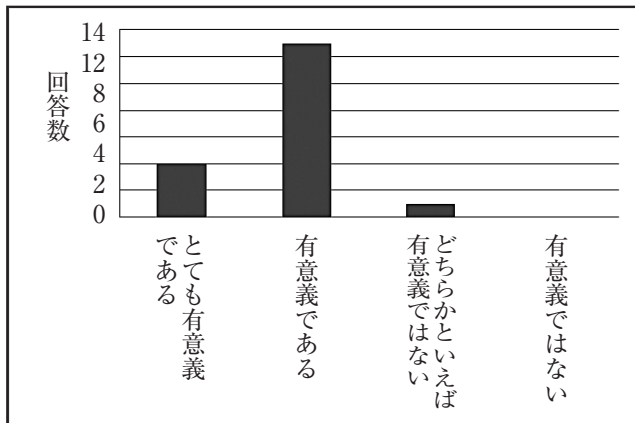


図2 受講者用サイトは有意義であったか

また、上記の設問の回答における「その理由やお気づきの点などについてお書きください」という自由記述回答欄への回答は、資料14に示すとおりであった。

3. 研修全般についての意見・感想

「その他、情報手段活用による教育的支援指導者研修について、ご意見・ご感想等ありましたらお書きください」という設問に対する自由記述回答は、資料14に示すとおりであった。

IV 考 察

1. 校内研修等の実施状況について

図1に示されているように、回答のあった18名の受講者のうち、7名から校内研修等を実施したという回答が得られた。これは、回答者（18名）の39%にあたる。

このフォローアップ調査を実施したのは、研修終了後約3か月を経過した時点であり、受講者が各学校等に帰ってから比較的短期間の間に、研修の成果を生かした校内研修等の取組を実施している事例があることがわかる。また、実施した研修会等についての自由記述回答によれば、校内研修だけでなく、より広域の地域における研修会を実施している例もみられた。

また、「今後実施する予定がある」という回答は4件であり、すでに「実施した」という回答を合わせると11件となっていた。この結果は、研修のねらいのとおり、受講者が各学校等にもどってから、研修の成果を還元するための取組を行っている事例があることを示している。

2. 受講者用サイトの利用について

図2に示されているように、回答のあった18名の受講者のうち、4名が「とても有意義である」と回答し、13名が「有意義である」と回答した。これらを合わせると17名となり、回答者（18名）の94%にあたる。

この結果が示すように、研修終了後も継続的に受講者用サイトを利用できるようにしたことは、有意義であるという評価であったといえる。

自由記述回答においても、受講者用サイトの利用期間の延長を希望する記述がみられた。受講者用サイトは、研修終了後における情報共有や意見交換の場として、受講者から有意義であったと評価されたといえる。

本研修では、このような受講者用サイトの活用を行っているが、他のさまざまな研修においても、受講者用サイトを有効に活用できると考えられる。

受講者用サイトを活用する場合の課題として、自由記述回答にもあるが、さらに受講者の利用を活発にするための手立てを検討する必要があると考えられる。

3. 全般についての意見・感想について

全般についての意見や感想については、研修がよかったことについての記述が多くみられたが、「障害別に実施し、もう少し掘り下げた内容を研修したいと思った」という意見もみられ、障害種別により深い内容について研修したいと考える受講者に対して、どのような内容を提供していくかについて、さらに検討が必要である。

4. まとめ

本研究では、初の試みとして、受講者サイトを利用して、研修終了後約3か月を経過した時点で、受講者が各地で研修を実施した事例があるかどうかについてフォローアップ調査を行った。その結果、18名の受講者から回答があり、そのうちの7名から校内研修等を実施したという回答が得られた。研修終了後の比較的短期間の間に、研修のねらいのとおり、各学校等にもどって研修の成果を還元する取組を行っている事例があることが示された。また、本研修では、研修終了後も受講者用サイトを継続的に利用できるようにしたが、これについても受講者から有意義であるという評価が得られた。

引用文献

- 1) 小野龍智：平成16年度「障害のある子どもの情報教育とその指導法」における取り組み、プロジェクト研究「障害のある児童生徒等の教育の総合的情報提供体制の構築と活用に関する実際研究」報告書、独立行政法人国立特殊教育総合研究所、37-43、2005。
- 2) 小野龍智：インターネットを利用した情報教育の講習会について－「障害のある子どもの情報教育とその指導」をとおして－、調査研究「障害のある児童生徒等の教育の総合的情報提供体制におけるコンテンツの充実・普及方策に関する実際研究（平成17年度～平成18年

度)」研究報告書，独立行政法人国立特別支援教育総合研究所，29-33，2007.

3) 中澤恵江・小野龍智：盲ろう児童生徒担当教諭モデル講習会－二回の実施を通じたプログラムの改善－. 調査研究「障害のある児童生徒等の教育の総合的情報提供体制におけるコンテンツの充実・普及方策に関する実際研究（平成17年度～平成18年度）」研究報告書，独立行

政法人国立特別支援教育総合研究所，34-36，2007.

4) 太田容次：情報手段活用による教育的支援指導者研修におけるeラーニング活用. 調査研究「障害のある児童生徒等の教育の総合的情報提供体制におけるコンテンツの充実・普及方策に関する実際研究（平成17年度～平成18年度）」研究報告書，独立行政法人国立特別支援教育総合研究所，37-39，2007.

研修評価の課題と今後の研修評価の在り方について

松村 勘由 ・ 横尾 俊 ・ 柳澤亜希子

(教育研修情報部)

ここでは、研修評価の考え方について整理するとともに、本研究所及び都道府県等の特別支援教育センターで行っている研修評価の状況や課題をまとめ、今後の研修評価の課題について考察する。

I 研修評価の考え方の整理

1. 研修評価の考え方

ここでは、原 義彦²⁾が説明している事業評価についての記述を参考に、研修評価の考えを次のように整理した。

① 研修評価とは

研修評価には、各研修コース等を評価対象とする研修コースの評価と、それらの総体としての研修事業の評価がある。

研修の事業の評価は、研修事業の構想及びその具体であるコース編成等に関わる事業全体の企画とその実施を対象とする評価である。(以下、「研修事業評価」とする。)

各研修コースの評価は、研修事業として構成された個々の研修コースの企画と実施を対象とする評価である。(以下、「研修コース評価」とする。)

1) 研修事業評価

研修事業評価は、研修事業の実施状況や成果を測定・分析するなどして実態を把握し、事業主体の目的や目標に照らして、価値的な判断を加えることであろう。

2) 研修コース評価

研修コース評価は、各研修コースの実施状況や成果を測定・分析するなどして実態を把握し、各研修コースの目的や目標に照らして、価値的な判断を加えることであろう。

② 研修評価の目的

研修評価の目的は、目標の設定や計画の策定等の研修の企画及び研修の実施の改善に生かすためのものである。研修評価の結果によって得られた資料は、次の研修事業や研修コースの企画・実施の改善に活用される。

2. 研修評価の区分

研修評価は、何を評価するか、誰が評価するか、いつどのように評価するかによって区分できる。

① 評価の対象

研修事業評価であれば、研修事業全体の企画や実施状況が対象になる。研修コース評価であれば、個々の研修コースの企画や実施状況が対象になる。

② 評価者

研修事業評価は、内部評価と外部評価があり、それぞれ事業主体である組織による自己評価と組織外の関係者及び広く一般が評価者となるだろう。

研修コース評価では、研修企画及び実施担当者、受講者、受講者の所属機関や派遣元などが評価者となる。

③ 評価の方法

いつどのように評価するかは、研修事業評価、研修コース評価それぞれについて、評価の過程、評価項目や評価指標に関連付けられ、その方法が検討される。

3. 評価の過程

評価は、企画段階、実施段階、実施後の各段階において行われることが多い。

① 企画段階の評価

研修事業評価であれば、研修事業の企画に関するニーズのアセスメントが重要となる。

研修コース評価では、受講対象者の研修ニーズや受講に係るレディネスのアセスメントが必要となる。

② 実施段階の評価

研修事業評価であれば、実施計画期間内の実施状況を評価し、実施状況の確認や計画の修正などの改善を行うことになるだろう。

研修コース評価であれば、研修コースの実施期間中の実施状況について、受講者や実施担当者による評価を行い、その確認と必要な改善を行うことになる。

③ 実施後の評価

研修事業評価であれば、実施計画期間の終了にあたる時期に、期間内の実施状況を評価し、次の研修事業計画の策定や改善の資料とすることになる。

研修コース評価であれば、研修コースの終了時、また、終了後の一定期間などを区切って、受講者、受講者の所属機関・派遣元などによる評価と研修コースの企画及び実施担当者による評価を行い、次の研修コースの企画立案や改

善の資料とすることになる。

4. アウトプット評価とアウトカム評価

近年、各事業の実施後の評価について、これまでのアウトプット評価に加えて、アウトカム評価が求められるようになってきた。

研修事業においても、研修事業計画として立案された事業が、どのように実施されたかを評価するアウトプット評価に加え、研修事業として実施したことが、その後、各地域や各現場にどのような価値的な変化をもたらしたのか評価するアウトカム評価の視点が必要になっている。

研修コース評価においても、各研修コースについての参加者数や受講者の研修状況を評価するアウトプット評価に加え、受講者が研修終了後に研修の成果を具体的にどのように地域や現場に還元したのかを評価するアウトカム評価の視点での評価が求められるようになった。

5. 評価項目と評価指標

何を観点として評価するかを示すのが評価項目である。設定する評価項目は、研修事業や研修コースの目標・計画、目的や企画などに沿ったものとなるだろう。研修事業評価であれば、研修事業の目標・計画にしたがって評価項目が設定されるであろうし、また、研修コース評価であれば、各研修コースの目的、カリキュラムやプログラム構成などにしたがって、評価項目が設定されるであろう。

各評価項目の評価には、評価指標が必要となる。評価指標は、募集定員に対する受講者数の充足度などの定量的な評価指標と受講者の研修プログラムに対する満足度などの定性的な評価指標があるだろう。

Ⅱ 本研究所が行っている研修事業及び各研修コースの評価と今後の課題

1. 本研究所の研修事業とその評価

① 本研究所が行っている研修事業

本研究所が実施する研修事業は、各都道府県等において、指導的な立場にある教職員及び今後の指導的な立場に立つことが期待される教職員を対象として行っている。

その目的は、国の教育政策に基づく教育を実施するために、各地方公共団体で指導的な立場に立つ人材の養成を地方と分担して行うこと、国の政策課題、喫緊の課題についての研修を各地方公共団体の指導者を対象に行い、実施の推進を図ること、地方公共団体で行うことの出来ない研修を国が行い地方を支援すること等である。

受講者は、それぞれの研修毎に受講資格を示し、都道府県等地方公共団体の教育委員会より推薦を受けた者について、理事長が決定している。

これらの規定は、本研究所が実施する研修事業が、都道府県等地方公共団体が行う教員研修、各学校で行う校内研修等との役割を区分するとともに、それらの研修と関連させながら、国として行うべき研修としての位置付けを示している。

② 研修事業の評価

本研究所の研修事業の評価は、研究所の中期目標・中期計画に対応し、その評価項目と評価指標が設定されている。研修事業の評価は、中期目標・中期計画に対する評価となっている。具体的には、以下のような研修の実施状況が評価の対象となっている。

- 1) 都道府県等の特別支援教育政策等の推進に寄与する専門性の向上のために、特別支援教育研究研修員制度実施すること
- 2) 各障害種別に対応する指導者の専門性の向上のために、特別支援教育専門研修を実施すること
- 3) 国の重要な特別支援教育政策や教育現場の喫緊の課題等に対応する指導者の養成のために各種研修等を実施すること

研修評価は、各研修の区分毎にその評価項目と評価指標が定められ、その総体が研究所の実施する研修事業の評価として、毎年、事業報告として報告されている。

本研究所の研修事業の評価項目と評価指標は、概ね次のようになっている。以下、今期、中期計画の記述から、研修区分に共通の内容の主なものを括った。

- 1) 各研修の受講者に対して、研修成果の還元に関する事前計画書等の作成・提出を求めるとともに、修了直後又は修了後1年後を目途として、研修の内容・方法等についてアンケート調査を実施し、平均85%以上の有意義であったとのプラス評価を確保し、仮に、85%を下回った場合には、研修の内容・方法等を改善する。また、受講者の任命権者である派遣元の教育委員会等に対して、研修成果の還元に関する事前計画書等の作成・提出を求めるとともに、修了1年後を目途として、研修成果の還元内容・方法等についてアンケート調査を実施し、80%以上の受講者が、各地域で行う研修、研究会等の企画・立案及び研修の講師として指導的な役割を担っているなどという結果などプラスの評価を確保する。仮に、80%を下回った場合には、研修の内容・方法等を改善するなどとしている。
- 2) 研究所が設定する受講者数に対する実際の受講者の参加率が85%以上となるようにし、仮に、実際の受講者の参加率が85%を下回った場合には、次年度の受講者数の見直し等、必要な措置を講じるとしている。

③ 研修評価に関する終了直後アンケート調査の実施

本研究所が研修の受講者を対象に研修修了時に行っているアンケート調査は、各研修の区分や研修コース毎の違い

はあるもの基本的には、次のような構成になっている。

- 1) 評価の目的についての説明
- 2) 研修コースの受講全体を通しての評価
- 3) 各研修コースのプログラム構成についての評価
- 4) 各研修コースで設定している講義・演習・研究協議等の各プログラムの評価
- 5) 各研修コースの研究所職員の対応や支援体制の評価

これまで、研修修了時のアンケート調査の様式の改善を次の観点で進めてきた。

- 1) 4件法での評価へ変更したこと
これまで、それぞれの評価項目について、肯定的な評価から否定的な評価まで5件法で行っていたが、肯定的でも否定的でもない中間的な評価を避け、評価の結果をより明確に得ることを目的に、4件法で行うこととした。
- 2) 評価の目的を明確にし、その趣旨を明記したこと
これまでのアンケート調査の中に、個人的な見解や自己評価などの記述が見られ、評価の目的とは異なる内容が記入されることがあった。そのため、アンケート調査の目的が、受講者個人の研修の状況について自己評価を求めるものではないこと、研修コース等の改善のために行うことなどの目的を明記した。
- 3) 企画趣旨に対応した評価指標を示したこと
これまで、特定の講義等について、肯定的であったり、否定的であったりというように、個々の受講者の知識や経験、教育観などを背景とした記述が見られることがあった。企画された研修が必ずしも個々のニーズや思いに対応するものではないことを踏まえ、指導者を対象とした研修であることなどの各研修の企画趣旨を示し、その趣旨目的に照らしての評価を求めるなどの評価の観点を明記した。

④ 研修評価に関する修了1年後アンケート調査の実施

各研修の受講者に対して、修了後1年後を目途として、研修の内容・方法等についてアンケート調査を、また、受講者の任命権者である派遣元の教育委員会に対して、研修成果の還元内容・方法等についてアンケート調査を実施することとしている。現在、アンケート調査項目について、次のような観点項目で検討が進められている。

- 1) 受講者に対するアンケート
 - ・当初の研修の受講の目的
 - ・受講した結果、職務において役立ったこと
 - ・研修成果の還元内容・方法
- 2) 任命権者に対するアンケート
 - ・受講者の研修への派遣の目的
 - ・研修への派遣の条件
 - ・研修目的の達成状況

・研修成果の活用状況

2. 研究所の研修評価の特徴と今後の課題

研究所の研修評価は、研究所が設定する受講者数に対する実際の受講者の参加率を指標とする定量的な測定を行う評価と受講者の研修に対する満足度(有意義であったかどうか)を指標とする定性的な測定を行う評価があり、そのいずれもが研修のアウトプット評価と位置付けられる。一方、研修修了後に受講者が、各地域で行う研修、研究会等の企画・立案及び研修の講師として指導的な役割を担っているなど研修成果を活用し、地域や学校の教育の向上に寄与しているかどうかを評価するアウトカム評価が導入されている。

これらの評価は、研究所が行う研修事業の内部評価の結果として示されるとともに、外部評価を経て公表され、研究所が行う事業についての説明責任を果たすものである。

研修事業の具体的な改善に関わる評価については、これまで、研修の企画・実施などに関わる様々な観点から、行ってきた。研修企画担当及び研修実施の各担当部署と各研修区分毎に担当実施グループにおいて、その時々々の評価の視点で行ってきた。こうしたこれまでの評価の取組を整理し、評価に関わる様式の整備をすることも検討課題となるだろう。

Ⅲ 特別支援教育センターの研修評価の課題

全国特別支援教育センター協議会(事務局:国立特別支援教育総合研究所)では、毎年、各地域の持ち回りで全国大会を実施している。全国大会では、研修の分科会が設定され、その年のテーマに沿った実践報告と協議が行われている。松村(筆者)が参加した最近数年の分科会の協議の中で、研修の評価について、次のような内容の報告や協議があった。

① 各種研修講座の評価項目と評価指標について

各種研修講座の募集定員に対する参加率や受講者の修了後の満足度を評価項目とする。

② 研修評価の結果の反映

参加率や満足度などを基に評価指標を数値化した指数を設定して、研修講座を廃止する目安としている。

③ 政策課題に対応する研修講座の評価

政策課題に対応する研修講座など、受講者の満足度のみで評価することが適切でないものもある。

④ 評価に係る事務負担

研修講座について、各講座の設定内容、各講師の選定などを詳細に尋ねるアンケート調査を行っているセンターがあり、その集計・分析のための事務量が膨大になっている。(以上、松村が、その内容を整理している。)

これらの報告を整理すると次のような課題が見えてくる。

研修評価は、受講者の満足度を評価項目・評価指標とすることが多いが、結果の分析には、留意する必要がある。希望研修など、受講者のニーズに対応した研修では受講者の満足度を指標とすることで、改善につながる評価を得ることができるが、政策的な課題に対応した研修などでは、受講者のニーズとは関わりなく、必要な事項を取り上げられることがあり、満足度が低いことについては、その背景も含めた分析が必要となる。

評価項目、評価指標を多く設定することでより適切な評価を得ることができると考えられるが、資料の収集や整理分析に当たる時間や労力等とのバランスを考え、より効果的で適切な評価資料の収集が必要ではないか。

限られた財源と資源を有効に活用するために、研修講座の改廃が必須であり、そのためには研修評価が重要である。

IV 今後の研修評価の在り方について

以上、研修評価の考え方と本研究所及び各都道府県特別支援教育センターの研修評価について整理した。これらの整理を踏まえ、今後の研修評価の在り方を検討するための視点と思われることを以下に示す。

1. 研修評価の目的の明確化

研修の評価の目的は、①実施する事業についての公的機関としての説明責任を果たすこと、②研修の改善を検討するための資料を得ること、③限られた予算を有効に活用するための廃止（あるいは、継続、拡充等）を決定するための資料とすることなどであり、その目的にそった評価方法を検討すること。

2. 研修事業評価と研修コース評価の区分と関連付け

研修評価には、研修事業評価と研修コース評価があり、それぞれの区分に沿った評価、及び相互の関連を検討すること。

3. 企画評価と実施評価の区分と関連付け

研修の評価には、企画を観点とする評価と実施の状況を観点とする評価があり、それぞれの区分に沿った評価、及

び、相互の関連を検討すること。

4. 企画・実施・実施後に至る評価の過程の区分と関連付け

研修には、企画から実施及び評価に至る各プロセスがあり、それぞれの段階の評価と相互の関連を検討すること。

5. 評価の効率化を図ること

研修評価にあてる時間と労力及び費用等を視野に入れ、最小限のコストで的確な情報を得るための評価様式を検討すること。

6. 調査等の分析を的確に行うこと

調査等の結果がより適切な評価結果に結びつくように分析の視点を検討すること。

7. 評価結果に対する改善策、対応策を持つこと

評価結果が、研修の具体的な改善に結びつくように、可能な改善方策を検討すること。

8. 研修コースの改廃に関わる評価指標を持つこと

資源・財源の有効活用の観点から、役割が終わった研修コースが適切に廃止できるような評価項目と評価指標を検討すること。

V まとめ

ここでは、研修評価の考え方や現状について整理し、今後の研修評価の課題について考察した。

研修の評価は、それぞれの研修コースで実施されるプログラムを通して実現される教職員の変容として、評価されることには違いない。また、加えて、そのことが結果として、地域の教育の向上にどう貢献したか、また、地域の児童生徒にどのような価値的変容をもたらしたかについても目を向けていくことが求められるであろう。

参考文献

- 1) 独立行政法人 情報処理推進機構：ITスキル標準センター，研修ロードマップ，2006.
- 2) 原 義彦：事業評価の技法生涯学習研究 e 事典，2007.

第7章 まとめと今後の課題

この章では、本調査研究で得られた知見のまとめと今後の課題について述べている。

研究のまとめと今後の課題

ここでは、調査研究「障害のある子どもの教育における情報手段活用についての知識・技能の効果的な普及方策に関する実際研究」で得られた知見のまとめと今後の課題について述べる。

I 平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」の実施結果

本調査研究では、平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」をモデル研修として位置づけ、その研修企画の取組と実施結果について報告した。

平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」の研修企画においては、平成18年度のアンケート調査結果の分析を踏まえて、改善点を明確にした。

平成19年度の受講者へのアンケート調査では、次の結果が得られた。

- 1) この研修の指導者研修としての意義については、「とても有意義である」という回答が62%、「有意義である」という回答が38%であり、これらを合わせると100%となっていた。
- 2) 講義・実習・演習が指導者研修として必要な知識や技術を習得する上で役立つものであったかどうかについては、「とても役立つものである」という回答が59%、「役立つものである」という回答が41%であり、これらを合わせると100%となっていた。
- 3) 研究協議が、指導者研修として有意義であったかどうかについては、「とても有意義である」という回答が53%、「有意義である」という回答が41%であり、これらを合わせると94%となっていた。
- 4) ポスター発表による研修成果発表が指導者研修として有意義であるかどうかについては、「とても有意義である」という回答が44%、「有意義である」という回答が50%であり、これらを合わせると94%となっていた。
- 5) 配信講義の視聴による事前学習が有効であったかどうかについては、「とても有効である」という回答が22%、「有効である」という回答が66%であり、これらを合わせると88%となっていた。
- 6) 受講者用Webサイトが研修を円滑かつ効果的に進める上で有効であったかどうかについては、「とても有効である」という回答が66%、「有効である」という回答が31%であり、これらを合わせると97%となっ

ていた。

これらの結果が示すように、平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」については、全般的に受講者から高評価を得ているといえることができる。しかし、事前学習については、さらに有効なものとするよう一層の検討が必要であると考えられる。(渡邊 章)

II 研修支援ツールの活用について

1. 研修用コンテンツの蓄積と活用を支援するためのシステムの構築について

国立特別支援教育総合研究所における情報手段活用による教育的支援指導者研修における研修を支援するシステムを構築するにあたり、研修を支援するツールとして、eラーニングシステムの現状について調査を行った。研修では、平成18年度は、CMS (Contents Management System) の一種であるXOOPSを利用し、平成19年度は、XOOPSを基に教育機関向けに開発されたLMS (Learning Management System)のNetCommons を利用した。しかし、今回の取組ではLMSとしての機能を十分に活用したとはいえず、CMSとしての活用にとどまった。今後、LMSとしての機能を十分に活用するためには検討が必要なことも多く残されている。(渡邊 正裕)

2. 事前学習及びフォローアップにおける研修支援ツールの活用について

本調査研究では、研修支援ツールの活用と来所しての講義・演習等を組み合わせた受講者参加型のカリキュラム構成を基にした研修において、研修支援ツールの活用を検討した。事前・事後とも来所研修との関連を高めることで、研修支援ツールの利用は質・量共に活性化した。今後、研修を支援するためのLMS (Learning Management System) としての検討が必要であると考えられる。

(太田 容次)

III 研修評価について

1. 平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」のフォローアップ調査について

本研究では、初の試みとして、受講者用Webサイトを利用して、研修受講後約3か月を経過した時点で、受講者が各地にもどってから研修を企画・実施した事例があるか

どうかについてフォローアップ調査を行った。

その結果、18名の受講者から回答があり、そのうちの7名から校内研修等を実施したという回答が得られた。このフォローアップ調査により、研修受講後約3か月の時点において、研修の成果を各学校等に還元する取組を行っている事例があることが示された。

また、この研修では、研修終了後も受講者用サイトを利用できるようにしたが、このことについては、回答のあった18名の受講者のうち4名が「とても有意義である」と回答し、13名が「有意義である」と回答した。研修終了後の受講者用サイトの利用は、受講者にとって有意義であると評価されたということが出来る。(渡邊 章)

2. 研修評価の課題と今後の研修評価の在り方について

研修評価の考え方について整理するとともに、本研究所及び都道府県等の特別支援教育センターで行っている研修評価の状況や課題をまとめ、今後の研修評価の課題について考察した。

教員研修の評価は、研修事業で実施されるプログラムを通して実現される教職員の変容とともに、地域の教育の向上にどう貢献し、地域の児童生徒にどのような価値的変容をもたらしたかについても目を向けていくことなどが今後の課題となった。(松村 勸由)

V 今後の課題

平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」では種々の改善を行い実施した。その結果、受講者からおおむね高評価を得ることができた。また、今回の取組で初めて実施した研修終了後3か月時点でのフォローアップ調査の結果、研修受講者が各地にもどってから、校内研修等で研修の成果を各学校に還元した事例があることが示された。

平成20年度においては、障害のある子どもの教育における情報手段活用に関する内容は、専門研修の中の「重点選択プログラム」として位置づけられることとなったため、より短期間で効果的な研修を実施することが課題になると考えられる。

そのため、本調査研究における検討を踏まえて、事前学習のための講義配信や受講者用Webサイトを、さらに有効に活用し、短期間の日程でも十分に効果があがるように、研修の効率的な実施方法を検討していく必要があると考えられる。(渡邊 章)

資 料

ここでは、本調査研究に関する資料を掲載している。

(資料1)

平成3年度の教育工学コースの講義・演習等と時間数

教育工学概論	6
特殊教育行政と情報手段の利用	3
特殊教育諸学校におけるコンピュータの利用	3
特殊教育における情報手段の利用の意義	9
特殊教育における知的C A I システム	3
特殊教育における認知心理学的C A I	3
認知心理学的C A I システム実習	3
障害者とコンピュータ	3
職業指導とパソコンの利用	3
コンピュータと健康に関する諸問題	3
教育機器の活用とマイコン利用	3
教育におけるニューメディアの利用	3
特殊教育における情報機器を活用した指導事例	12
視覚障害者の情報処理	6
重複障害児の指導とコンピュータ	3
マルチメディアとハイパーテキスト	3
特殊教育におけるマルチメディアの活用法	3
コンピュータの機能と基本的操作	3
特殊教育用の教材プログラム	6
学習ソフトウェアの作成法	3
特殊教育で有効な周辺機器	6
音楽(含M I D I)機能の利用法	3
パソコン通信の利用法	3
音声合成の利用法	3
スーパーインポーズ機能の利用法	3
データベースと情報検索	6
データベースアプリケーションの利用法	3
グラフィックツールの活用法	3
特殊教育におけるサウンズと映像の利用法	3
マウス・タッチスクリーンの利用法	3
自作教材・教具の工夫	3
教材・教具(実習)ー視覚障害教育とコンピューター	6
教材プログラム作成実習	24
拡張入出力装置の利用法と制作	6
実地研修	12
研究協議	15

(注) 上記の他、短期研修のどのコースにも共通な講義・実習・実地研修等が設定されている。

(資料2)

平成14年度の情報教育コースの講義・演習等と時間数

教育工学概論	3
特殊教育における教育工学	6
特殊教育における情報教育	6
福祉工学概論	3
特殊教育行政と情報機器の活用	3
障害者とコンピュータ	3
障害児者のためのテクニカルエイド	3
アシスティブテクノロジーと米国の教育制度	3
子どもの認知特性の理解と教材の利用	3
インターネットの基礎	6
インターネットのバリアフリー	3
特殊教育におけるインターネットの活用と課題	3
情報発信の技法	6
情報倫理と個人情報の保護	3
情報教育研修会の企画と運営	3
脳の生理・病理	6
情報機器の活用と医学的な配慮	3
コンピュータと健康に関する諸問題	6
知的障害教育とコンピュータ	6
視覚障害者とコミュニケーション支援機器	3
重複障害児のコミュニケーション	3
コミュニケーションエイド入門	6
コンピュータの基礎	9
放送・映像教材の活用	6
特殊教育におけるおもちゃの活用	3
特殊教育における教材ソフトウェアの利用	3
特殊教育における教材・教具の利用の在り方	3
特殊教育における教材・教具の活用	3
自作教材を活用した授業づくり	3
障害に応じた教材作成実習	36
実地研修	12
研究協議	21

(注) 上記の他、短期研修のどのコースにも共通な講義・実習・実地研修等が設定されている。

(資料3)

平成16年度の情報手段活用による教育的支援指導者講習会の講義・演習等と時間数

[講義]

特殊教育における情報手段活用の意義	1
情報手段活用を推進するための施策について	3
福祉施策と情報機器活用	3
個別の指導計画と情報手段の活用	1.5
職業教育における情報教育カリキュラム	1.5
視覚障害教育における情報手段活用の実際	1.5
聴覚・言語障害教育における情報手段活用の実際	1.5
知的障害教育における情報手段活用の実際	1.5
肢体不自由教育における情報手段活用の実際	3
病弱教育における情報手段活用の実際	1.5
自閉症教育における情報手段活用の実際	1.5
LD, ADHA, 高機能自閉症教育における情報手段活用の実際	3
特殊教育用学習ソフトウェアの利用法	1.5
AAC入門	3
盲ろう（二重障害）ネットワーク	1.5
障害者の高等教育における情報手段活用の実際	1.5
情報教育研修の企画と運営	1.5

[講義と演習]

重度・重複障害教育における情報手段活用の実態	6
情報手段活用における医学的な配慮とフィッティングの工夫	4.5

[演習・実習]

障害者のインターネット利用と情報機器のアクセシビリティ	6
アシスティブテクノロジーの導入と評価	3
情報関連支援機器操作演習	3
研修のまとめ（研究協議）	1

(資料4)

平成18年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」アンケート

氏名	
----	--

(氏名は差し支えなければご記入ください。)

本アンケートは、研修事業の評価と今後の改善・充実のために実施するものです。趣旨をご理解いただき、ご協力をお願いいたします。

本研修は、障害のある子どもの情報教育を担当する教職員で各県等で指導的立場にある者に対して、情報手段活用による教育的支援（アシスティブ・テクノロジー）等の専門的知識及び技能を高め、その指導力の向上を図ることを目的として実施しています。

このような趣旨を踏まえて、今回の研修について皆さんがどのように思われたかをお尋ねします。
[該当項目に○印を付け、その理由やお気づきの点などできるだけ具体的に記述してください。]

1. 今回の研修は、全体として満足のものでしたか。

- (1) とても満足だった
- (2) 満足だった
- (3) どちらかといえば満足でなかった
- (4) 満足でなかった

その理由やお気づきの点などをお書きください。

.....

.....

.....

.....

2. この研修では、事前学習を踏まえ、来所時の講義・演習等の受講を通して研修を進めるように計画しています。プログラムの内容や編成の方法は適切であったと思いますか。

- (1) とても適切であった
- (2) 適切であった
- (3) どちらかといえば適切ではなかった
- (4) 適切ではなかった

その理由やお気づきの点などをお書きください。

.....

.....

.....

事前学習の内容について、お気づきの点があればお書きください。

.....

.....

.....

(裏面に続く)

来所時の講義・演習等の内容について、お気づきの点があればお書きください。

.....
.....
.....
.....

3. 関係職員の支援体制や対応は、研修の受講に当たって適切でしたか。

- (1) とても適切であった
- (2) 適切であった
- (3) どちらかといえば適切ではなかった
- (4) 適切ではなかった

その理由やお気づきの点などをお書きください。

.....
.....
.....
.....

4. 研修の受講に当たって、必要な施設・設備は整えられていましたか。

- (1) とてもよかった
- (2) よかった
- (3) どちらかといえばよくなかった
- (4) よくなかった

その理由やお気づきの点などをお書きください。

.....
.....
.....
.....

5. 生活環境はどうでしたか。

- (1) とてもよかった
- (2) よかった
- (3) どちらかといえばよくなかった
- (4) よくなかった

その理由やお気づきの点などをお書きください。

.....
.....
.....
.....

6. その他、開催時期や日数等を含め、ご意見がありましたらお書きください。

.....
.....
.....
.....

ご協力ありがとうございました。

(資料5)

平成18年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」

アンケート自由記述回答

(個人名、班名、機関名、製品名等に関する記述が含まれている回答は省略した。)

2) プログラム内容・編成について

「この研修では、事前学習を踏まえ、来所時の講義・演習等の受講を通して研修を進めるように計画しています。プログラムの内容や編成の方法は適切であったと思いますか。」という設問に対する各選択肢の回答における自由記述回答

「とても適切であった」

- ・ どういった内容か予備知識がもてた。
- ・ 事前学習のビデオを観てもあまり良く分かりませんでした。受講前の意欲の問題かもしれません。
- ・ 研究企画書についての説明が不足していたと思います。しかしリーダーの養成とその研修の成果を生かすための取組はとても良いものだと思います。
- ・ 事前にいくつかの問題点を洗い出し、講義ばかりでなく研修員同士で協議しながら進めていく時間などもあり充実していた。

「適切であった」

- ・ 中身の濃い内容ばかりだった。ただその研修を消化するのに時間が足りなかった。戻ってからの研修までにきちんと整理して伝えていきたい。
- ・ 秋葉原に行く前にスイッチ・トイの製作があると良かった。
- ・ 同じような内容や概要が多かったので、その分専門的な話を聴きたかったです。特に障害種別については導入的なことは短めでよいのでは。有名な先生方の話が聴けて良かったです。
- ・ 新しい取組だと思います。
- ・ なかなか聴くことの出来ない講師の方や実習があり良かったが自分の企画案の内容の講義がポスター作成後なのが残念であった。
- ・ 研修企画案、ポスター作成について私を含め多くの先生方が戸惑っていました。具体的にどういうものを作成し、どのような形で進めていくのかが(全てはじめてだったので)見通しが持てなかったように思います。今年度の取組が次年度以降の参考資料にできれば良いのですが。
- ・ 適切だったと思います。肢体不自由の学校の先生にはとても役立つものだと思います。盲学校の私としてはやや物足りない気もしましたが、今後の特別支援学校への移行のためには大切な内容だと感じました。
- ・ 事前学習はいいプログラムであるが時間的にはなかなか見る時間がない。第三ステージのフォローアップがフォーラム等でされるのは大変よいアイデアと思いました。
- ・ ポスター作成の時間をもっと確保してほしい。講座前後の自主研はあったが、不十分。確保されたのは、ほとんど印刷に使われた。
- ・ 講義資料等(フォーラムに)アップしてくださり助かりました。ありがとうございました。
- ・ 事前レポートの主旨が分かりづらかったと思います。

「どちらかといえば適切でなかった」

- ・ 初めての試みで難しかったかもしれないがポスター等、具体的な進め方を事前にしっかり知らせてほしかった。
- ・ 企画案→企画書・ポスターと見通しが持ちにくかった。説明が直前であることもあったのでもう少し余裕をみていただくと有難かった。

選択肢の回答はなかったが自由記述回答があったもの

- ・ 研修企画案の作成が分かりにくかったです。

「事前学習の内容について、お気づきの点があればお書きください。」という設問に対する自由記述回答
(回答を分類し、内容を表す見出しを付けた)

[よい]

- ・事前に企画案を作っておいて良かったです。問題意識をもって研修を受ける事で、より内容を身近に感じることができました。

[事前レポート]

- ・事前に提出した受講者レポート（研修企画案）の書き方が分かりにくかったです。
- ・今回は初の試みだったせいでしょうが、レポートの例がもう少し分かりやすければ良かったかもしれません。
- ・研修企画案を作成するための情報がうまく理解できなかった。
- ・インターネット配信による講義は研修の概要が事前に分かり良かったです。提出資料に関しては記入例もありましたが、どのようなもの(内容)にすれば良いのか少し戸惑いもありました。勘違いを起こさないような例示の仕方をしていただけると有難いです。
- ・見本及び今回の研修の意味・目指すものが来るまでは分かりにくかった。
- ・記入例を見て書きましたが主旨がよく理解できずメールにて問い合わせてしまいました。丁寧な返事を頂き作成することができました。あの記入例は分かりづらかったです。すみません。
- ・レジメだけでも良いと思う。

[事前学習]

- ・今回の事前学習については時間をとることができませんでした。
- ・普段の業務があまりに忙しく十分講義ビデオなどを見ることはできませんでした。もっとちゃんと予習してくれば良かったと来てから反省しました。
- ・研究所に来てからではなく、事前学習の段階でもっと電子掲示板を有効に活用すれば良かった、と反省しています。
- ・講座数がもっとあれば良かったのではないかと思います。

[その他]

- ・個人的な問題なのだろうと思いますが、事前にIDとパスワードがうまく手元に届かず苦労した。
- ・個人のIDなどが封筒に入っていたことに気付くまで時間がかかりました。
- ・開けない（保存できない）データが少しありました。

「来所時の講義・演習等の内容について、お気づきの点があればお書きください。」という設問に対する自由記述回答（回答を分類し、内容を表す見出しを付けた）

[よい]

- ・講義の1つ1つがとても勉強になるものばかりでした。
- ・宿泊所のオリエンテーションは大変助かりました。
- ・生活面・講義演習について、はじめに丁寧に説明して頂き、分かりやすく見通しを持つことができました。
- ・スイッチの製作、勉強になりました。

[研修の目的]

- ・私もよく理解できておりませんでした。この研修の目的を当初理解できていない方がおられました。

[内容]

- ・少し焦点が定まらない講座もありましたが…。
- ・もう少し詳しい内容でも良いかもしれません。
- ・用意した内容が消化しきれない講義・演習がいくつかあり残念でした。

[時間]

- ・参加型の研修が多くて良かったと思います。知識だけの理解ではなく体験を通した理解が大切だと思いました。又、講師の先生方の専門性あるお話は、とても参考になりました。しかし内容に比して時間が不足していたように思います。
- ・時間が足らなくなり最後まで聴けなかった講義がいくつかあったので残念でした。
- ・時間に追われて後半の内容が若干早足な場面があり、2週間の期間としてはボリュームがあったような気がする。
- ・講義をしてくださる先生方にはもう少し時間の必要な場面もあり、余裕をもった時間割であればより深い内容が聴けたかなと思います。

[見学]

- ・学校見学の日程が大変厳しかった。日程をもっと考えてほしい。

(資料6)

平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」講義等内容

講義等の内容	コマ数	変更点
[事前学習] 研修内容に関するオリエンテーション (15分程度) 特別支援教育における情報手段活用の意義と研究所の活動 (15分程度)		
[総論・施策関係] 情報手段活用を推進するための施策 福祉施策と情報機器活用	0.5 0.5	
[各論・障害種別] 視覚障害教育における情報手段の活用 聴覚・言語障害教育における情報手段の活用 知的障害教育における情報手段の活用 肢体不自由教育における情報手段の活用 病弱教育における情報手段の活用 自閉症教育における情報手段の活用と実際 [筑波大学附属久里浜特別支援学校における実地研修] 発達障害教育における情報手段の活用	0.5 0.5 0.5 0.5 0.5 1.0 0.5	変更
[演習・実習を含むもの] 重度・重複障害教育における情報手段の活用 (講義・実習) 情報手段活用における医学的な配慮とフィティングの工夫 (講義・演習) 情報関連支援機器及びアクセシビリティ (実習) アシスティブ・テクノロジーの導入と評価 (講義・演習)	2.0 1.0 1.0 1.0	拡充
[情報教育・e-AT 関連で構成すべき内容] アシスティブ・テクノロジーの活用 個別の指導計画と情報手段の活用 高等教育及び就労における ICT の活用 生活に密着した情報モラルと個人情報の保護	1.0 0.5 0.5 0.5	
[研究協議等] 研究協議1 (研修内容のオリエンテーション含む), 2, 3, 4, 5, 6 研修成果発表会 (ポスター発表)		拡充

(資料7)

平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」日程表

この研修受講のため、電子会議システム等を活用できるよう、専用 Web サイトを開設する。
 また、専用 Web サイトにより、次の内容について、研修受講に当たっての事前学習を行うものとする。
 「研修内容に関するオリエンテーション」(15分程度)
 「特別支援教育における情報手段活用の意義と研究所の活動」(15分程度)

		午前 (9:15~12:15)			午後 (13:15~16:15)		
9 / 3	月	受付 10:00 ~10:45	開講式 11:00 ~11:15	オリエンテーション 11:15~12:15	研究協議 1 13:15~14:40	情報手段活用を推進するための施策 14:50~16:15	端末利用説明 16:30 ~17:15
4	火	重度・重複障害教育における情報手段の活用 (講義・実習)					
5	水	視覚障害教育における情報手段の活用 9:15~10:40	聴覚言語障害教育における情報手段の活用 10:50~12:15	福祉施策と情報機器活用 13:15~14:40	研究協議 2 14:50~16:15		
6	木	研究協議 3			アシスティブ・テクノロジーの活用		
7	金	発達障害教育における情報手段の活用 9:15~10:40	個別の指導計画と情報手段の活用 10:50~12:15	情報手段活用における医学的な配慮とフィッティングの工夫 (講義・演習)			
10	月	アシスティブ・テクノロジーの導入と評価 (講義・演習)			情報関連支援機器及びアクセシビリティ (実習)		
11	火	自閉症教育における情報手段の活用と実際			知的障害教育における情報手段の活用 13:15~14:40	研究協議 4 14:50~16:15	
12	水	肢体不自由教育における情報手段の活用 9:15~10:40	病弱教育における情報手段の活用 10:50~12:15	研究協議 5			
13	木	生活に密着した情報モラルと個人情報の保護 9:15~10:40	高等教育及び就労におけるICT活用 10:50~12:15	研究協議 6		ポスター印刷	
14	金	研修成果発表会 (ポスター発表) 9:15~11:45		閉講式 12:00-			

(資料8)

平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」受講者レポートについて

受講者は、下記の要領にしたがってレポートを作成し、提出してください。

1. 作成いただくレポートのテーマ・内容

本研修は、障害のある子どもに対する情報教育・情報手段活用による教育的支援（アシスティブ・テクノロジー）に関する専門的知識及び技能を高め、各地域で研修を企画・実施することができる力を身に付けることを目標としています。ついては、ご自身の情報手段活用に関するこれまでの取組と、この研修を通じて深めたいと考えている事柄について、レポートにまとめてください。

(1) 情報手段活用に関するこれまでの取組

(障害のある子どもへの情報手段を活用した教育的支援に関して、ご自身が行ってきた取組)

(2) 研修で深めたいこと

(この研修を通じて、深めたいと考えている事柄について 簡潔にお書きください)

2. レポートの様式と提出期限

(1) レポートの様式

上記2点をA4版1枚程度にまとめてください。(様式例を参照してください。)

(2) 提出日・提出先

8月17日(金)までにメール添付により研修情報課研修係まで提出してください。

また、専用Webサイトの電子会議室にも、併せて提出してください。

(3) 関心の高い事項(キーワード)

なお、研究協議のグループ編成の参考として、関心の高い事項について、下記キーワードにより、最も関心のある事項を第一希望、次に関心のある事項を第二希望として、レポートの提出時、メール本文にてお知らせください。

①障害に応じた機器利用、②教材作成、③アクセシビリティ、④AAC、④ネットワーク利用、⑤その他(具体的にお書きください)

(様式例) 平成19年度情報手段活用による教育的支援指導者研修 レポート

受講番号 _____ 所属: _____ 氏名: _____

障害種別(例: 視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱、その他(_____))

1. 情報手段活用に関するこれまでの取組

2. 研修で深めたいこと(簡潔にお書きください)

※レポート作成に当たっての留意事項

提出されたレポートは、そのまま印刷(白黒印刷)し、受講者全員へ配付する予定です。レポートの作成に当たっては、各学校・機関の部外秘情報及び個人情報保護・管理に留意してください。

なお、このレポートは、今後、当研究所の研究資料としても利用させていただきます。

(資料9)

研究協議の実施内容

期 日	実施内容
9月3日(月) (13時15分～14時40分)	[研究協議1] ・進め方のオリエンテーション ・班メンバー顔合わせ ・自己紹介 ・班長を決める。 ・各回の司会者・記録者を決める。 ・研修成果発表会までのおおよその進め方について話し合う。
9月5日(水) (14時50分～16時15分)	[研究協議2] ・各班で協議を行う。 ・各回の司会者は研究協議の進行を行う。 ・各回の記録者は、どのような議論があったかをA4版で1枚にまとめ(資料10)、各班の実施グループメンバーに、次回の研究協議の際に渡す。
9月6日(木) (9時15分～12時15分)	[研究協議3] ・各班で協議を行う。
9月11日(火) (14時50分～16時15分)	[研究協議4] ・各班で協議を行う。
9月12日(水) (13時15分～16時15分)	[研究協議5] ・各班で協議を行う。
9月13日(木) (13時15分～16時15分)	[研究協議6] ・ポスター作成を行う。 ・ポスターが完成した班は、印刷等を行う。 ・発表の仕方について検討する。
9月14日(金) (9時15分～11時45分)	[研修成果発表会] ・各班からの発表を行う。

[研究協議の各班の運営について]

- ・研究協議の時間では、各班のメンバーの関心のある内容について、学校等にもどってから知識・技能をどのように普及させていけばよいかという観点から、研修企画案について検討する。
- ・協議の進行は、各回の司会者が行う。
- ・班長は、実施グループメンバーとの連絡窓口となる。
- ・研究所の実施グループメンバーは、適宜、助言、連絡調整等にあたる。

(資料10)

研究協議・議事録様式

班名	
期日	平成〇年〇月〇日 () 〇時〇分～〇時〇分
班メンバー	
協議内容	

(資料 1 1)

平成 19 年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」アンケート

氏 名	
-----	--

【このアンケートの目的とお願い】

このアンケートは、研究所における研修事業の改善・充実の資料とさせていただくために、回答をお願いするものです。

今回の情報手段活用による教育的支援指導者研修は、障害のある子どもの情報教育を担当する教職員で、各都道府県及び政令指定都市において指導的立場にある者に対して、情報手段活用による教育的支援（アシスティブ・テクノロジー）等の専門的知識及び技能を高め、その指導力の向上を図ることを目的としています。

このような研修の目的をご理解いただき、アンケートへのご協力をお願いいたします。

[該当項目に○印を付け、その理由やお気づきの点などできるだけ具体的に記述してください。]

I 研修全体について

この研修は、指導者研修として有意義であると思いますか。

- (1) とても有意義である
- (2) 有意義である
- (3) どちらかといえば有意義ではない
- (4) 有意義ではない

その理由やお気づきの点などについて、お書きください。

.....
.....
.....

II 研修内容について

1. 講義・実習・演習について

この研修の講義・実習・演習は、指導者研修として必要な知識や技術を習得する上で役立つものであると思いますか。

- (1) とても役立つものである
- (2) 役立つものである
- (3) どちらかといえば役立たない
- (4) 役立たない

その理由やお気づきの点などについて、お書きください。

.....
.....
.....

2. 研究協議について

この研修では、研修企画について研究協議を行いました。この研究協議は指導者研修として有意義であると思いますか。

- (1) とても有意義である
- (2) 有意義である
- (3) どちらかといえば有意義ではない
- (4) 有意義ではない

(裏面に続く)

その理由やお気づきの点などについて、お書きください。

.....
.....
.....

3. 研修成果発表について

この研修では、研究協議での検討を踏まえて、ポスター発表による研修成果の発表を行いました。この研修成果発表は指導者研修として有意義であると思いますか。

- (1) とても有意義である
- (2) 有意義である
- (3) どちらかといえば有意義ではない
- (4) 有意義ではない

その理由やお気づきの点などについて、お書きください。

.....
.....
.....

Ⅲ 事前学習について

この研修では、配信講義の視聴による事前学習を実施しています。配信講義の視聴による事前学習は、効果的に研修を進める上で有効であったと思いますか。

- (1) とても有効である
- (2) 有効である
- (3) どちらかといえば有効ではない
- (4) 有効ではない

その理由やお気づきの点などについて、お書きください。

.....
.....
.....

Ⅳ 受講者用 Web サイトについて

この研修では、受講者用 Web サイトを設けています。受講者用 Web サイトは、研修を円滑かつ効果的に進める上で有効であったと思いますか。

- (1) とても有効である
- (2) 有効である
- (3) どちらかといえば有効ではない
- (4) 有効ではない

その理由やお気づきの点などについて、お書きください。

.....
.....
.....

Ⅴ 研修についてのご意見・ご感想

その他、研修生活面も含め、今回の研修についてご意見・ご感想等ありましたら、お書きください。

.....
.....
.....
.....

ご協力ありがとうございました。

(資料12)

平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」

アンケート自由記述回答

(個人名、班名、機関名、製品名等に関する記述が含まれている回答は省略した。)

I 研修全体について

「この研修は、指導者研修として有意義であると思いますか。」という設問に対する各選択肢の回答における自由記述回答

「とても有意義である」

- ・特別支援教育における情報手段の活用について、多方面の見地で講義内容が組みこまれている点。地域における情報教育の指導者としての意識づけ、スキルの向上に重点が置かれている点。
- ・幅広く研修できたのは良かった。
- ・他県の多くの方々と意見、情報交換をすることができたことや、幅広い範囲で情報手段活用についての話を聞くことができた。
- ・最新の情報を入手でき、たいへんありがたかったです。
- ・研修の幅の広さ、内容の深さ、ともに満足できるというよりも、期待をはるかに上まわるものでした。研修を受ける前と、後とでは、知識、見識がまるで変わっている自分があります。普通学級で発達障害の児童を受け持ち、どうすることもできず、お手上げ状態であったのですが、砂漠の中で、地図と方位磁針を手にしたようなものです。
- ・大変勉強になりました。今回で、この研修がなくなる（形をかえて残るらしいですが）のは本当に残念な気持ち、というのが率直な思いです。何よりも全国にネットワークができたというのが“財産”かなあ、と思っています。
- ・特別支援教育として求められている点を網羅した内容で、情報手段以上の障害をもった児童生徒、あるいは障害者のコミュニケーションを考える上で大変有意義でした。情報に精通している者が受ける研修という思いがありましたが、特別支援教育に携わる者が生活場面、学習場面において活用していく上で大事な視点や方法を教えていただきました。ありがとうございます。
- ・帰校して広めていくにあたり、その研修の仕方、企画方法についても学ぶことができ、良かった。
- ・自分の中の課題であった「AAC はなぜ広まらないか」という問題に自分なりの解答を得ることができたため。また、日本各地の先生方と交流し、情報交換できることも有意義であった。
- ・2週間という短い期間ですが、各都道府県の情報教育を担当し、指導的立場にある者同士が意見、思いや悩みを交換する場にもなり、各地域に戻り、アシスティブ・テクノロジーについて、職員に報告し、実践に向け協力してがんばるぞ、というエネルギーを得ることができました。
- ・第一ステージから第三ステージまであり、参加前の心構えが違った。意識をもって取り組めた。（ただ、力が足りていませんが・・・）内容も盛りだくさんで、様々な方面からの話が聞けて良かった。
- ・最新の情報や考え方を聞くことができる。
- ・あらゆる障害種に対するアシスティブ・テクノロジーについて、学ぶことができました。私は知的障害をもつ子どもに関わっていますが、共通する部分があることを感じました。
- ・文科省の通達などを見ていると、情報手段活用を積極的に行うよう、書いてあるが、地方の学校では、そこまでの意識はないように思える。県から1名というのは残念ではあるが、もっと多くの人に知ってもらいたい分野である。私自身も、戻ってから多くのことを伝達しなければならないと強く思った。
- ・これまで、単に機器やソフトウェアの利用という観点からしか考えたことがなかったが、様々な障害種に応じた、教育的、医療的・・・など、いろいろな角度からの詳しい話で、とてもよかった。
- ・様々な視点から、情報手段活用について考える機会を持つことができた。また、普段はなかなか聞くことのできない先生方の講義を受講できて、良かった。
- ・全国のメンバーが集まって話ができるよい機会である。

- ・各分野、とてもすばらしい先生方だったと思います。

「有意義である」

- ・様々な情報手段の活用について、講義、演習があり、多方面に見る視点が養われ、良い研修だったと思います。ただ、私は、ろう学校に勤務しておりますが、聴覚に関する講義が少なかったのは少し残念でした。
- ・この機会でないとは知ることのできない情報（施設にある教材教具、機器、各県の様子、講演等）を得ることができました。
- ・対象となる障害種が幅広かったのも、もっとポイントを絞りこんで色々と研修を受けたかったという思いもあるが、逆に色々な情報手段の話の聞き、応用していける部分が、とても多い事に気付けたのは良かった。
- ・メンバーの中に機器等の使用経験の少ない方が見受けられた。県の推薦の段階で、もう少し考慮した人選が必要ではないかと感じた。
- ・私自身は、今まで全く情報教育を担当してきていなかったもので、予備知識がなく、ついていけない所も多くありました。自分の学校とは違う障害種のことを詳しく知ることができてよかったです。
- ・様々な障害種の先生と意見交換できたことは有意義でした。その反面、広く浅くの講義でもう少し掘り下げた情報を聞きたいという思いもありました。今後、フォーラムや今回頂いた資料を参考に自分なりに研修をしたいと思います。
- ・ここの存在を知ったことが大変良かったです。
- ・今まで自分にはなかった視点・考え方や知識を得ることができて有意義であった。実習・演習がもう少しあってもよいと感じた。
- ・10日間の研修なので、たくさんの内容を得ることができるが、一過性のものになりかねない、と思った。やはり、10日間であれば、一人の講師が1週目と2週目に講義されてもよかったかなと、欲ばりなことを考えています。
- ・情報手段活用についての方向性と色々な情報を知ることができ、良かった。
- ・浅く広くのような感じがした。パソコンに詳しくない者にとってはよく分からない部分が多かった。これだけのことをするには期間が短い。
- ・「情報手段活用による」と名をうっていることと、アシスティブ・テクノロジーの目指すところに少し違和感がありました。工夫していきたいと思います。

II 研修内容について

1. 講義・実習・演習について

「この研修の講義・実習・演習は、指導者研修として必要な知識や技術を習得する上で役立つものであると思いますか。」という設問に対する各選択肢の回答における自由記述回答

「とても役立つものである」

- ・それぞれの障害の基本的な知識と、ICT活用の視点について、具体例を通して習得することができた点。特別支援教育におけるICTの利活用について、政策の視点から、とらえることができた点。
- ・すべての障害種における講義があり、幅広い知識を得ることができた。実習、演習では、教材の作成、機器の操作体験等で、知識、技術を高めることができた。
- ・今回の研修は、教員経験年数の浅い自分にとっては、とても興味深い講義内容が多かった。
- ・更に、時間をとって深めたい内容もありました。
- ・講義、実習、演習を受ける側の立場に立てたこと、また、その際の指導者としての知識や技術を習得できたことがとても良かった。
- ・それぞれの内容は、これまでの実践を振り返る意味でも、とても有意義でした。時間不足の講義もあり、内容を一部省略ということにもなり、もう少しお話を伺えたらと思うことがありました。

- ・講義だけではなく、実習ができよかった。PCでの実習をもっとしたかった。
- ・2週間という短い期間の中で幅広い研修ができ、色々な方面から考えられるヒントを得ることができました。スイッチ作り、楽しかったです。
- ・講義一つ一つが中身が濃く、様々な知識や情報を得ることができるから。また、全国から先生方が集まっていて、各都道府県の情報交換もでき、とても良かった。講義だけでなく、実習もあったのでより良かった。
- ・演習では、より具体的に活動できたので、よかった。
- ・機器の使用例やフィッティングの演習などは、肢体不自由児が中心だった。重度の知的障害児や自閉症児へのVOCA等の使用例をもっと知りたかった。
- ・学校現場にいては、知ることのできないような、先進的、高度な内容にふれることができました。
- ・私自身、パソコン＝情報という考えで、研修に来たが、その考えがあさはかだったことを思いしらされた。多くの実践を学ぶことができ、子どもたちへの指導の幅が広がったと確信している。
- ・学座だけでなく、体験的な内容も多く取り入れており、メリハリがあつてよかった。また、自分が研修講座を開くにあたって、気をつける点なども見えてきてよかった。
- ・自分のあまり知らなかった、視覚、聴覚障害者の支援ツール等を見ることができた。
- ・知らないことも学べてとてもよかった。
- ・盛りだくさんの内容で、とても充実して過ごさせて頂きました。

「役立つものである」

- ・既習のものが多かったが、知識として得られるものもあった。何より、指導者側の視点で、どのように研修を開けば、聞き手に分かりやすいのかを、多くの先生方の講義から学びました。
- ・自分自身のスキルアップにとっても役立つが、現場では、まだ、情報機器と聞いただけで敬遠する職員も多い。そういった方々に研修成果を返していく為の一助として、今回の研修の資料がとても有意義だが、できれば電子情報でフォーラムに置いて下さると3rdステップに生かせると思った。
- ・講義と実習の比較を同等に設定するのがよい。より高度な活用方法を学びたいと思って参加している者もいると思う。
- ・指導者として・・・と考えるならば、今回お聞きした講義をもとに自分なりに深めていけばよいというヒントを出してもらったように思います。
- ・自分の知らないサイトやプレゼンテーションの効果的な発信の仕方を学ぶことができました。
- ・普段聞くことができない内容の講義があつて、また、他種の障害について理解を深められました。
- ・ある程度、この分野の取組をしていたので、既に知っていることもあつたが、深い部分や新しい部分もあり、また、新たな実践に役立てることができるものであると感じた。
- ・講義の内容が重複している場合が多くあつた。できれば、調整してもらい、より多くの知識、情報を伝えてもらえるとありがたい。また、いくつかの講義で、プロジェクターの内容と手元に配られた資料の内容が異なっていたり、情報活用と全く異なる講義内容で最後まで話しをされたりしていたのが、気になった。
- ・様々な視点（観点）から、情報手段活用をとらえて、知識・技術を習得できたのは、とても有意義で、役に立つものであると言える。
- ・話し合いでは、少し時間が足りなかった。スイッチの実際がよく分かった。

2. 研究協議について

「この研修では、研修企画について研究協議を行いました。この研究協議は指導者研修として有意義であると思いますか。」という設問に対する各選択肢の回答における自由記述回答

「とても有意義である」

- ・様々な考え方、立場の者が、協議することで合意を形成する過程を経験できる。

- ・障害種の違う先生方と話し合いを重ねる中で、いろいろな意見や情報を聞くことができ、視野が広がった。また、先生方の研修や教育に臨む姿勢には大変な刺激を受けた。
- ・グループ発表は、内容も決まり、実りのある研修であった。お互いの意見も聞けたのは良かった。
- ・初めての体験で、興味深く取り組むことができました。
- ・各県の先生方から、いろいろなノウハウを学ぶことができてよかった。
- ・みなで協議し、1つのものをつくるのはよかった。
- ・まずは、お互いが共通理解をして、意見を出し合い、一つの指導について、納得するまで話し合う、大切さを感じました。また、自分が報告会を行う時に、大切にしなければならないポイントも学ぶことができました。
- ・一つの課題に対し、数人のグループで話し合うことができ、話し合いも深まったし、様々な情報が聞けて良かった。
- ・限られたポスター紙面の中で、苦慮しながら、6人で協議しながら作成したことは、よかったと思うし、情報量が少ない分、資料作成をしたことで、自分の中で整理できたように思う。
- ・ポスター作りを通じて、実践できそうな、研修計画ができた。
- ・他県の先生方と情報交換ができ、参考になる部分がたくさんあった。
- ・「アクセシビリティ」について、あまり知りませんでした。話し合いを重ねるなかで、相互理解ができたことが良かったです。
- ・短い時間の中で、グループの考えを、まとめていくときの運営の視点が見えた。
- ・他の学校の先生方と意見を交換して、考え方に広がりを持てたと思う。

「有意義である」

- ・いろいろな学校の現状について話を聞くことができたことや、課題意識を持って取り組むことができた。
- ・県によって学校の違いが出ていて、それらの方々と協議することで様々な事を学ぶことができました。
- ・事前資料において、2週間で得て、深めたい事柄には、近づけない内容であったことは残念でした。
- ・なかなか横のつながりが持ちにくい中、共通の課題を持つことで親しく接することができるようになったと思います。
- ・これもメンバーがある程度、同じ経験の上で実践を話し合っていくのが理想だと思う。
- ・いろいろな人の立場を考えたり、指導の方向性を見い出せたりすることができたと思います。
- ・確かに良かったが、方針がみえずに困った。
- ・他の学校の先生方と交流し合えるという点で有意義でした。できれば事前に所属グループを知らせていただけなら、見通しをもって本研修にのぞめたのではと思いました。
- ・情報交換ができた、ほかの先生方の考え方を知ることができ、よかった。
- ・他校の様子がよく分かりました。最近の様子が分かりました。
- ・ひとりひとりの立場や考え方が違う中で、ひとつのテーマについて協議するのは難しい部分もあると思いました。しかし、自主的に研究をするという点で有意義であったと思います。

「どちらかといえば有意義ではない」

- ・「機器利用」といった単語から想像する内容にかなり差があり、その部分でどう折り合いをつけるかに手間取ったのでは。2か月程期間があるともっと研修成果がはっきりすると感じた。2週間であれば、悩みが共通しそうな単位（例えば、高等部卒業間近とか、重度重複の小学部とか）が良いのでは。
- ・話がなかなか進まず、難しさを感じた。
- ・テーマが広すぎて、まとまりをつけるのに時間がかかってしまいましたが、その分深い話をすることができました。

3. 研修成果発表について

「この研修では、研究協議での検討を踏まえて、ポスター発表による研修成果の発表を行いました。この研修成果発表は指導者研修として有意義であると思いますか。」という設問に対する各選択肢の回答における自由記述回答

「とても有意義である」

- ・効果的なポスター作成とプレゼンの方法について検討し、振り返りを通して、改善につなげることができた点。
- ・ポスター発表の後の時間でいろいろな話を聞いたことが有意義だった。
- ・プレゼンをすることによって、同じような指導者の立場から、いろいろ指導助言を受けることができたから。
- ・研修のまとめとして、よく分かるものでした。質疑応答は全体であった方がよいと思いました。
- ・後の質疑応答がいろいろな気づきがあってよかった。
- ・ポスターの作り方、まとめ方等、大変参考になりました。自分たちは、専門的知識及び技能を高めるだけでなく、相手に伝える技能も必要なもので、とても有意義なものとなりました。
- ・2週間の研修結果を発表で評価される点がシビアであるが、有意義な形で終えると思う。
- ・研究協議やポスター発表の内容を自校や自県での研修に役立てることができる。
- ・課題を深めることができ、有意義である。
- ・意見を出し合いながら、1つの物を作りあげ、発表するという経験は、教員になってから、そう多くはないのですが、同じ志を持った人達と作りあげたものを見て、とても意義深く思えました。自他を問わず、よくまとめていたと思います。
- ・よく考えて、よい結果のものをつくられた。
- ・集大成として発表できて、これからの自分に生かしていける部分を考えていきたいと思っています。

「有意義である」

- ・一定の成果物を提示することができ、よかったと思います。
- ・受け身の研修だけでなく、グループで課題を持って取り組めたのがよかったです。ポスターができあがった時には、みんなで作り上げたという充足感がありました。
- ・他の発表を聞くことは情報を得ることができよかった。
- ・ポスター1枚にどれだけの情報をわかりやすくレイアウトするかが難しかったです。プレゼンテーションソフトを活用することに慣れているので、このような発表は新鮮でした。
- ・とても分かりやすかったと思います。
- ・一つのテーマを元に話し合いを進めていくという研究協議があることはよかったと思います。
- ・各班の発表を聞いてよかった。
- ・質疑応答は、全体であった方がよかったです。自分の気づかない視点からの質問もあると思いますので。
- ・気づきなどを知りよかった。
- ・他校の様子がよくわかりました。
- ・他の参加者の考えにふれることができました。
- ・決められた時間内に必要な情報や伝えたい情報をアピールさせる発表会が組めるかという点で、いろいろと学ぶことが多かった。ただ、この発表会の主旨は「研修の企画・立案」であったが、その点から外れている班があったのが残念であった。

「どちらかといえば有意義ではない」

- ・どちらかという、各学校に戻って実践してからの成果の掲載や、それに向けての実践プランの発表の方がより効果的なのでは。
- ・研究協議自体（ポスターを作る過程での取組）は有意義だが、発表は他の班の人達と意見をかわす時間が少なく、物足りなく感じた。

Ⅲ 事前学習について

「この研修では、配信講義の視聴による事前学習を実施しています。配信講義の視聴による事前学習は、効率的に研修を進める上で有効であったと思いますか。」という設問に対する各選択肢の回答における自由記述回答

「とても有効である」

- ・研修の導入となる講義を事前に視聴することができ、研修の見通しや心構えを持つことができた。
- ・見通しを持って研修に取り組めるので良い。
- ・受講したい時間にアクセスして、内容を何度もくり返し確認することができることは、とても有意義であった。
- ・心構えを築くことができ、安心感もありました。
- ・行ってから研修ではなく、事前に（学校にいる間に）他の教師と今回の研修で学んでくること、生徒の実態等を意識して研修に臨めた。
- ・2回だけではなく、5回ぐらいやってもらいたかった。
- ・今回学ぶ内容を言葉として、あまり聞いたことがなく、とても不安だったのですが、事前研修のおかげでスムーズに頭に入ってきました。
- ・研修の概要を知り、心構えをすることができました。

「有効である」

- ・研修に対する心構えができたように思います。
- ・ガイダンスに加え、各研修で何がしかの予習課題を設けてもらってもよかったかも。どういった講義か想像できるし、その研修へ向けたモチベーションも上がるのでは。特に研修前が休業中だと多少動きやすいので。
- ・方法はよいと思う。今後はどのような内容を行うのが課題であると思う。
- ・事前に大筋の流れが分かってよかったです。レポートを作成する際にも役立ちました。
- ・予備知識をつけることで、自分の課題をもち、研修に参加することができました。
- ・配信講義とともに、参考となるホームページの紹介もあり、事前に目を通すことができました。各講師の先生方のホームページも積極的にのぞいていければよかったと感じています。
- ・0からのスタートではなかったのがよかった。
- ・研修に行くぞという気持ちになりましたが、もう少し、いろいろな配信講義があれば、さらに、効率的に研修を進めることができたと思います。研修前のレポート大変でした。
- ・意欲をもって取り組むことにつながった。
- ・事前に語句用語を調べてくるだけでも、研修にスムーズに入れた。
- ・事前に、計画を知り、準備することができ、よかった。
- ・音声によるインターフェイスは、自分に適していました。
- ・研修を受ける準備として、たいへん興味深く、拝見しました。
- ・およその内容をつかむことができたのでよかった。
- ・事前に研修の全体イメージをつかめて良かったと思う。
- ・導入とモチベーションを高める、よい機会であった。

「どちらかといえば有効ではない」

- ・校務を行いながらの事前研修だったので、忙しくないように配慮してくださったものだと思うのですが、今回の内容でしたら、配布資料だけでよかったのではないかと思います。
- ・もう少し深い内容であってもよいと思う。
- ・視聴して参加したが、視聴していなくても問題のない内容だった。（同じような内容をオリエンテーションで行っていた。）
- ・もっとたくさん講義や課題が出ると思っていた。

IV 受講者用 Web サイトについて

「この研修では、受講者用 Web サイトを設けています。受講者用 Web サイトは、研修を円滑かつ効果的に進める上で有効であったと思いますか。」という設問に対する各選択肢の回答における自由記述回答

「とても有効である」

- ・情報を共有することで、課題解決に向けた協働の取組が促進される点。
- ・研修時間後も Web 上で情報交換することができ、研修の見通しや、心構えを持つことができた。
- ・事前から使用できたのは良かった。
- ・いろいろな情報を得ることができ、研究協議の記録を共有することができたことなど、とてもよかった。
- ・校内でのグループウェア構築の参考にもなりました。
- ・多くの先生方から、持っている情報をのせていただいたので、参考になりました。学校で活用させていただきます。
- ・さすが、情報教育の研修会だという感じがしました。
- ・こういった職員向けの情報手段活用も、研修の機会があると嬉しい。各学校単位で、担当が手さぐりでサーバをたてたり、ネットワークを構築したりしているので・・・。
- ・いわゆる“第3ステージ”として受講後も、しばらく Web サイトを通して研修できるから。
- ・とても円滑で効果的に研修を進めることのできたツールだった。
- ・他のグループでの話題も共有することができて、よかったです。様々な情報を得ることができました。
- ・他の先生方との情報のやりとりがとてもスムーズにでき、よかったですと思います。ネットワーク作りということは、こういうことを指すのだと確認することができました。
- ・研修時間以外の学習で有効に活用することができた。
- ・いろいろと情報交換ができたし、資料や情報の共有も容易であった。参加者向けのクローズドなサイトなので安心感がある。研修後も活用していければよいと思う。
- ・毎日、朝、昼、夕、晩チェックしていました。お互いの情報交換がスムーズにでき、たくさん興味のある資料を得ることができました。今年度中と言わずに、ずっと、開いてほしいです。
- ・情報交換やファイルの共有が、円滑に行えて良かった。
- ・期間だけでなく、前後も使えることがメリット。
- ・情報の共有ができ、有意義だった。
- ・グループでなかなか集まることのできないのと、それぞれの持っている様々な情報を簡単に交換できて良かった。
- ・ファイルを共有できたり、掲示板での会話など、有意義であった。
- ・情報交換のよい場であった。
- ・Web 上での意見交換が活発に行われていて、コンスタントに情報を得ることができました。

「有効である」

- ・連絡、データのやりとりは便利でした。
- ・どこからでも見れる。双方向で意見交換もでき、今後の展開に期待がもてる。
- ・もう少し、Web サイトを残しておいて欲しい。
- ・来る前から情報交換ができ、良かった。
- ・自県にもどっても、他県の先生方との情報交換や研究所からの情報を入手できる。
- ・データの受け渡しが楽でした。
- ・まさしく、情報手段の活用だと思います。
- ・おもしろい取組でした。ただ、有効であるという評価にとどめさせてもらったのは、第3ステージが年内までということがあります。この分野に携わる教員は、地元に戻ると少なく、情報手段がほとんどありません。できたら、もう少し期間をのばしていただき、何らかの形ができるまでの橋渡しをしていただけたらと思います。

V 研修についてのご意見・ご感想

「その他、研修生活面も含め、今回の研修についてご意見・ご感想等ありましたら、お書きください。」という設問に対する自由記述回答（回答を分類し、内容を表す見出しを付けた）

[よかった]

- ・共同生活をする中で、受講者同士のコミュニケーションが深まった。（研修内容を深めること、地域情報に関すること、指導内容や方法に関することなどを課題として交流を深めることができた。）
- ・知識、技術も浅いまま参加してしまい、「指導者研修」という内容には私は対象外だったかもしれませんが、本当にたくさんの知識、情報を得ることができました。また全国の先生方との、つながりもできました。ここで学んだことを学校、地域に還元していきたいと思います。
- ・大変興味深く、研修させていただきました。いろいろな分野において、たくさんの情報を得られることができ、有意義でした。ありがとうございました。
- ・とても有意義な2週間でした。この研修を活かして今後の生活で、生かしていきたいと思う。
- ・2週間にわたり、たいへんお世話になりました。
- ・ありがとうございました。特に、研修担当の先生方には、毎日資料を準備していただいて、とても良いお土産ができました。また、グループ研修や空き時間に助言して下さった先生方にも感謝申し上げます。お忙しい中、本当にお世話になりました。
- ・研修生活面、研修内容、私達に対するサポート等、期待以上のものがありました。私にとって、長い教員生活の中でも特筆すべき体験であったと思います。講師の方々、研修を支えてくれたスタッフの方々に、心から感謝したいと思います。ありがとうございました。どこまでできるかわかりませんが、ここで得たことを現場で還元したいと思います。
- ・職場の皆さんへ成果を還元したいですし、こういった機会を、もっともっと経験できると、職員のモチベーションが上がると思います。機会を与えて下さり、ありがとうございました。
- ・生活面はいろいろ配慮いただき、研修にも思いっきりのぞめました。これもスタッフの方々のおかげです。ありがとうございました。
- ・2週間、お世話になりました。多くの情報を得られたこと、各地に知り合いができたことは、とても貴重でした。ありがとうございました。
- ・自分自身、経験も浅く、これからの課題が、この研修を通してみつかることができ、とても有意義でした。本当にありがとうございました。
- ・学校に戻り、これもしたい、あれもやってみたいというエネルギーをたくさんいただくことができました。まずは、いろいろ学んだことを伝え、そのことについて、熱い話し合いを行い、子ども達の指導にいかしていきたいと考えています。2週間ありがとうございました。
- ・大変勉強になりました。学校へもちかえり、少しでも現場に還元していきたいと思います。お世話になりました。
- ・研究所の先生方が、とても熱心で、どの方もいい方ばかりで、過ごしやすく居心地がよかったです。大変お世話になり、ありがとうございました。
- ・ありがとうございました。
- ・このような有意義な研修が、今年度で終わるのはとても残念です。ぜひとも再開されることを望みます。2週間ありがとうございました。
- ・色々な方の協力で、今回の研修を受けることができた。来る前は、講義等の数に、ついていけるかが不安であったが、研修内容が充実していて、あっという間に終わってしまったような気がする。この分野の専門性を磨きたいという気持ちも強くなった。特総研の先生、スタッフの皆さま、ありがとうございました。
- ・今回、この研修は終了ということですが、日本の特別支援教育の発信地として、なんとか復活（新設？）させていただきたいと思います。多くのことを学ぶことができました。ありがとうございました。
- ・とても助かりました。今回で最後ということですが、続けるべきだと思います。
- ・ぜひ、続けてほしいです。

[その他]

- ・開講式のお話にもあったように、今回の研修が最後になるかもということは、残念に思います。参加者の少なさは2週間ということ（臨時講師がつかない）、課業期間中ということが原因だと思いますが、今後は自分自身が情報をキャッチできるように、アンテナをはっていかなくてはならないでしょうし、また、他の先生方に情報を伝え、共有できていくと思います。
- ・昼の休みが短く、午後の研修のための、各自の準備が不足がちであった。各地からの情報が十分交換できなかった。
- ・2週間は少し短い気がした。土日を2回はさんで3週間くらいあった方が、もう少しゆったり、じっくり研修できると思った。
- ・とても良かったが、自主研修の時間を半日で良いから設定して欲しかったです。
- ・蟻が室内まで遊びにきて、殺すのもかわいそうなので、毎日追い出すことに困りました。
- ・参加する者は、どうしても荷物が多くなります。こちらで準備できれば、それにこしたことはありません。トイレトーパーやゴミ袋は、多少割高でも、宿泊棟で販売していただきたい。1階は、職員の通路になっていて、ブラインドをあけていられない。目かくしのようなものがあるとありがたいと思った。又は、他を通路にさせていただくとか。いろいろありがとうございました。この研修を生かして、また明日からがんばります。

(資料13)

平成19年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」

フォローアップ・アンケート

氏名	
----	--

[フォローアップ・アンケートへのご協力お願い]

9月に開催された「情報手段活用による教育的支援指導者研修」から、はやくも3ヶ月がたちました。研修に参加された先生方におかれましては、いかがお過ごしでしょうか。

このたび、この研修に参加された先生方に、フォローアップ・アンケートへのご協力をお願いしたく、何とぞよろしくお願い申し上げます。

このアンケートは、研究所で実施する今後の研修をより充実したものにしていくためにご協力をお願いするものです。

1. 研修したことの活用について

研修後からこれまでの間に、研修したことを生かして、校内研修等を行った事例がありますか。

- (1) 実施した
- (2) 実施していない
- (3) 今後実施する予定である
- (4) 未定

「実施した」とお答えの方は、実施した研修会等の名称について、お書きください。

--

2. 受講者用サイトについて

この研修では、研究所での研修のフォローアップとして、受講者用サイトを研修後に利用できるようにしましたが、これは有意義であると思いますか。

- (1) とても有意義である
- (2) 有意義である
- (3) どちらかといえば有意義ではない
- (4) 有意義ではない

その理由やお気づきの点などについてお書きください。

--

3. 情報手段活用による教育的支援指導者研修全般についてのご意見・ご感想

その他、情報手段活用による教育的支援指導者研修について、ご意見・ご感想等ありましたらお書きください。

--

ご協力ありがとうございました。

(資料 1 4)

平成 19 年度「情報手段活用による教育的支援指導者研修」

フォローアップ・アンケート自由記述回答

(個人名、班名、機関名、製品名等に関する記述が含まれている回答は省略した。)

1. 研修したことの活用について

「研修後からこれまでの間に、研修したことを生かして、校内研修等を行った事例がありますか」という設問における実施した研修会等の名称についての自由記述回答。

- ・研修報告会
- ・名称は研修報告という形でいたしました。内容については、情報教育と ICT 活用との違いや高等部段階での知的障害養護学校の目標、AT と AAC についての紹介、またその研修で勉強した支援者としての心得的な部分、それとモラルについてです。自分でも消化不良な部分が多かったのですが、講師のウェブサイトや、情報セキュリティ関係を参考にして調べられる部分は報告しました。
- ・障害に応じた情報機器の利用
- ・「特別な教育的ニーズと情報機器活用」において、AT 及び AAC の考え方や障害種ごとの具体的内容について紹介した。
- ・校内の初任者研修において、「アシスティブテクノロジーの活用について」という講義を行いました。来年度の夏には、全職員を対象に研修会を行う予定です。
- ・e-AT 機器体験会、コンピュータ研究会例会
- ・フォローアップ研修、特別支援学校教科指導能力向上研修

2. 受講者用サイトについて

「この研修では、研究所での研修のフォローアップとして、受講者用サイトを研修後に利用できるようにしましたが、これは有意義であると思いますか」という設問に対する各選択肢の回答における自由記述回答。

- 「とても有意義である」
- ・研修で知り合った方々の近況や、戻ってから見つけたサイトを交換することができた。
 - ・受講者のつながりが維持できていることで、必要な情報を探す際にも、内容を十分に絞り込んで投げかけることができる。
 - ・校内研修実施に向けての資料作りなど、いろいろなデータをもとに作成することができた。
 - ・情報交換ができた。学会の情報なども入り、参考になった。研修参加者と情報交換でき、資料などももらうことができた。自分たちで、立ち上げればよいが、なかなかその環境がすぐにできないので、参考になった。

- 「有意義である」
- ・研修後も、校内研修を開くにあたって、いろいろな情報を入手することができた。
 - ・様々な情報交換ができたのでよかったです。
 - ・自分がいろいろなことを学んだのだということを忘れずに、常に意識してられる。
 - ・有意義と思いますが、なかなか活用する時間がとれないのが残念です。
 - ・各校に帰った先生方がそれぞれの学校での授業例を紹介したり、新たな研修の情報を提供したりして、今後も活用していきたい。
 - ・自分にはなかった視点の考え方や情報を得ることができたから。
 - ・受講者用サイトは年度末（3月）まで利用できるようにしてほしい。
 - ・研修期間に気付かなかった点を確認できたり、他の参加者のその後の状況や情報を知ることができたり、大変参考になりました。自分の時間にゆとりがなかったため、十分活用できなくて残念です。

- ・研修後のフォローアップや情報交換の場としては一定の意義を有するものと思う。ただ、私自身もそうであるが、日々追われてなかなか研修を振り返ったりする余裕がなく、受講者用サイトもたまに見る程度でなかなか書き込むことがなかった。そういった人が多いと書き込みが活発にされず、いまひとつ活気のない状況になってしまう。そうするとますます書き込みをすることが億劫になってしまう。情報は発信と受信の双方があって成立するのであるから、積極的に発信できるように心がけたい。
- ・情報交換の場としてはとてもいいと思います。ただ、情報交換と言っても各職場に戻ればそれぞれの課題も多く、なかなか受講者間で意見交換ということにまでなりにくいと思います。特に、今回の研修は期間が2週間ということもあり、研修員間の深まりは今ひとつかなとも思います。
- ・研修終了後、現場に戻るとつい研修中に考えていたことを忘れてしまう。そのような時に、本サイトを閲覧したり、メールを読ませていただいたりすることで、再度認識をすることができる。

「どちらかといえば有意義ではない」

- ・日常の業務の中で、なかなか書き込みをする時間が生み出ませんでした。

3. 情報手段活用による教育的支援指導者研修全般についてのご意見・ご感想

その他、情報手段活用による教育的支援指導者研修について、ご意見・ご感想等ありましたらお書きください。
(回答を分類し、内容を表す見出しを付けた)

[よかった]

- ・大変ためになる研修でした。今後の授業の中に活かしていけるよう頑張りたいです。
- ・アシスティブテクノロジーに関する基礎的な知識を得ることができたこと、それだけでなく、たくさんの先生方と出会えたことで、世界が広がった気がします。戻ってから、さっそく活用できたこともあり、参加できたことが本当によかったです。
- ・研修は、2週間という短いものであったが、とても内容の濃い充実したものであった。今回の研修の成果をいろいろなところで発揮していきたいと思う。
- ・2週間という短い期間ではありましたが、中身の濃い研修をすることができました。講師・所員の先生方には大変お世話になりました。今回でこの研修が終了することは大変残念です。
- ・具体的な内容と、最新の情報を取り入れられたことはとても有意義であった。
- ・研修後、研修内容を伝達するための資料やそれに伴うデータを提供くださったことが、非常に助かりました。まだ、資料と口頭による報告しかしていない状況ですが、今後、研修した内容をできるだけ早く所属校職員や県内の関係職員に伝達するための研修会をもちたいと思っています。ただ、正直なところ膨大な研修内容を2週間で理解するのは難しく、もう一度研修を受けたいと思っています。来年度、この研修がなくなるかも知れないと言うことを聞いてとても残念に思います。いろいろお世話になりました。
- ・学校での授業等において今回研修したことが生かされていると感じます。それを研修でほかの教員にも伝えていけるような取り組みをしていければと思います。
- ・実際の授業にパワーポイントや液晶プロジェクターを活用するなど、研修で学んだことを徐々に生かしていけるようになってきました。今後もお世話になることがあると思います。その際はよろしく願いいたします。
- ・各方面の最新の情報を得ることができ、たいへん有意義でした。ありがとうございました。

[その他]

- ・2週間という短期間であったため、広く浅くの研修だったような気がする。「情報手段活用による教育的支援」という広い範囲の研修ではなく、グループでの研究協議のテーマのように、細かく分けてより専門的な研修ができたらいと感じた。
- ・障害別に実施し、もう少し掘り下げた内容を研修したいと思った。
- ・それぞれの校内研修で発表した資料を公開し合えたら、一層研修を通して学んだことが深まると感じる。
- ・もともと情報教育や AAC、AT 等について、ある程度の知識のある場合は、今回の研修でスキルアップできていい

のかもしれませんが。ただ、自分の場合は、ほとんどが新しい情報で、自分自身の勉強にはなりましたが、研修会を開くのは難しいと感じています。今回のことをきっかけに視点は広がったし、子どもへの教材等を考え直したり、深めたりすることには、つながったと思います。

- ・各県立養護学校で情報担当をしている者が情報交換をする情報担当者連絡会が存在しますが、ネットワーク管理・運営で四苦八苦している学校が大半で、この場で研修報告もしましたが、反応はいまひとつでした。一方、本校での新任者対象研修・10年次研修で行ったときには身近な部分として感じてもらった（特に高等部担任からは携帯電話のプロフサイトに生徒が登録していること、その対応について「自分たちがそういったものの存在自体をわかっていなかったこと」がとても大きな障壁であったことを報告された）ようです。職員会議等で釘を刺すのはほとんどが職員自身のセキュリティ意識向上なのですが、より多くの職員に子どもたちのケータイ事情を認識してもらう必要性を感じました。
- ・今後も配信によるフォローアップ研修を継続していただけると助かります。
- ・2週間の研修ではあったが、半日ぐらい、自由に研修でき、情報交換できるような場があったらよかった。毎日があっという間であったし、せわしい感じがした。慣れた頃には終わりなので、もう一週間ぐらいあればよいと思う。その逆で2週間とても充実して無駄なく研修ができよかった。時間をもてあますことなく、短期間の間に幅広くいろいろな研修ができてよかった。全く逆のような感じではあります。
- ・今回でこの研修は終わりだと思うと残念です。来年度の研修計画を見ると選択分野の一つになっていますね。情報機器というものがかつてのように特別なものではなくなってきたので、独立した研修として行う時代は終わったのかもしれませんが。しかし、情報機器の特徴や利点が生かされた教育がされているかという疑問を抱かざるを得ません。情報機器が生活の中で普通の道具になりつつある時代には、情報機器を普通に活用する教育、通常の教育活動の中に自然に情報機器を取り入れていく方向というものを考えていく時代かもしれません。個人的にはこれからは発達障害における機器利用、視覚障害における機器利用といった情報機器を中心にではなく、対応すべき状況を中心においたアプローチで研修を行ってもらえると実地に応用しやすいと思います。

調査研究

「障害のある子どもの教育における情報手段活用についての
知識・技能の効果的な普及方策に関する実際的研究」
(平成19年度)

研究報告書

平成20年3月発行

発行 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所
〒239-8585 神奈川県横須賀市野比5-1-1

